
魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

眈篋夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 孤高の黒き剣士

【Nコード】

N9474Z

【作者名】

毗篋夢

【あらすじ】

主人公は何の変わりもない只の高校生。そんな主人公はある日買い物に出かけ、その帰り道にひょんなことで死んでしまう。目が覚めたら……。これはよくあるとある転生の物語り、神様から貰った力で原作ブレイクをしていく。

No:01 終わりと始まり（前書き）

作者の初めての投稿で何かと至らぬところが多々あると思います
が、よろしく願います！！

楽しくやっていけたら良いと思います。

No:01 終わりと始まり

えっと・・・とりあえず目の前で
何が起こっているのかを整理しよう。

「で、あんた誰？」

・

そこは真っ白な空間で土下座をしている少女がいた。

おいそこっ！警察に電話すんな！！

「で、ここ何処？そんなもって、アンタ誰？」

「ごめんなさい、実は姉神様の机でモン○ン3rdでイビ○ジョー
を狩っていたら

気づいたら眠っていて、その・・・」

「・・・で？（もしかして・・・）」

「あたしのヨ○レで汚してしまつて、破けちゃいました。テヘッ」

「・・・やっちゃっていいよね？（怒）」

「ごめんなさー！ーいっ！ー！」

どうやら俺はこの少女のせいで死んだらしい。

「えっと、、マジかよ（汗）」

~~~~お亡くなりになる前~~~~

「たつたく暇だよなー」

俺は余りにも暇だったので新作のゲームのチェックをしに、

店へと足を運んでいた。「友達と遊べば？」とか言う奴は許さん！！

「なんか面白そうなゲームあるかなー？」

店の中で約1時間ほど商品を見回していたが、

特に気にいるものが見当たらなかったのでとりあえず

帰宅をすることにした。

帰宅途中喉が渴いたので飲み物を買い、公演のベンチで休んでいるところ

目の前でサッカーをして遊んでいた子供達の

サッカーボールが道路へとびだし、トラックが来ているのに気づかず  
その中の一人の少年はつられるように道路に飛び出した・・・

「へ？」

「ッ！あのガキッ！！」

~~~~~

そっか・・・俺

あの子供をかばってトラックにひかれて・・・

死んだのか。

「ねえ、そろそろいい？」

「ん？ああいいぞ」

（何か俺を殺しやがった少女が何かいつてきてらあ）

「アンタ今凄く失礼なこと考えたでしょ（ジトツ）」

「いや・・・別に・・・ソナナコトナイヨ（汗）」

「まあいいわそんなこと」

（じゃあ言つなよ）

「早速だけど、アンタを転生させるわ」

「ん、転生ってあれか？あのもう一度人生を楽しめる的な」
「そうそうそれぞれ」

うわー。まさしくあれだな。うん。

小説やゲームだな。・・・テンプレキタ

(。 。)

!!

「・・・話を戻すわよ」

「お、おう、」

「早速だけどあんたには「リリカルなんちら」って世界に逝ってもらうわ」

「ふゝん。・・・ちよつと待て、行かす世界の名前知らねえのかよ！

てか、行かすのとこ漢字違くなかったか!!」

「あーうるさい。転生できるだけ有難く想いなさいよ」

(・・・あれ、コイツ最初とキャラ違くないか?)

「あー。有難う」

「べ、別にアンタのためじゃないんだからね!!」

(ここでツンデレかよーー

・・・有りだな(´・`・´)キリッ)

「そんで、何か能力とかってもらえたりすんの？」

「え？ああーうん。できるわよ、何か要望とかあるわけ？」

要望？そんなの有るに決まっているだろが!!

「とりあえず・・・魔力・気力のランクEX。武道の心得。十二の

試練。

アニメや漫画の全能力使用可能・・・まあこんなもんで」

「・・・結構あるわね。全能力使用とかは多分・・・てか、絶対に制限とかあるからね。それと、容姿とかは？」

「まあ制限あるだろうな。容姿ねえ・・・主人公たちと同じ年で、見た目普通で、

髪は黒、目は緑で、身長は高め、体は細めでよろしく！」

「・・・こ、細かいわね」

「まあなあー面白そおじゃん？」

「ハア・・・まあいいわじゃあ送るわね」

「あいよー」

ここから俺の新しい人生が始まるのか・・・

「あ、言い忘れていたけど、生活とかは自分でしてねー」

「えっ！Σ（。d 111）」

「バイバーーーーイ」

「待てこら幼女——……………」

「・・・さーてイビ○ジョーの太刀作るぞー」

って！デバイス渡すの忘れた……………まあいつか」

N o : 0 1 終わりと始まり（後書き）

次回は主人公のプロピールを紹介させていただきます。

設定（キャラ紹介等）（前書き）

全く人気が無い作品ですが、よろしくです。

設定（キャラ紹介等）

主人公（オリキャラ？・登場人物）紹介

名前：冷氷 無月（れいひょう むげつ）

身長：134センチ

体重：34キロ

性格：あまり人を好まないが、困っている人には手を貸す。

能力：チート（多過ぎる）

魔法・気力：ランクEX

・剣が好きで近接戦闘を好む。

無月「・・・出鱈目だな」

作者「すまん、あんまりアニメとか知らないから知っている分フル活用させるには

これしかなかったのだ」

無月「・・・お前貧乏だもんな」

作者「おい、その痛々しいような人を見る目はなんだ？」

無月「いや、かわいそ・・・なんでもない」

作者「お前今明らかに「かわいそうだから」とかって言つつもりだつただろ！！」

無月「・・・フウ」

作者「溜息をつくなー！ー！！」

無月「で、こんな会話でいいのかよ」

作者「いや、実はお前と敵対する奴も追加する」

無月「敵対？斬っていいのか？」

作者「それは、今後の展開次第だな・・・まあ殺させはせんよ（笑）
では、モブキャラの御紹介〜」

無月「・・・（コイツ遊んでやがる）」

名前：高町 秀哉 （たかまち しゅうや）

身長：131センチ

体重：31キロ

性格：女に目が無い（特に美少女）。自意識過剰。自己中心。

能力：特になし

魔法：ランクSSS （気力は神に頼まなかったため常人以下。）

・魔力Ⅱ強さだと考えており、見た目と魔力量だけは良い。

無月「・・・」

作者「・・・」

無月「コイツさ、ランクSSSまでしか絶対知らなかっただろ」

作者「全くもって同感だ」

無月「しかもゝ能力：特になしって・・・ただのバカだろ」

作者「まあいいだろ。つってもどうしよっかなー」

無月「何がだ？」

作者「いや、俺ってさ原作知らないじゃん。どうやって物語を進めようかと・・・」

無月「・・・よくそなので小説書こうと思ったな」

作者「いやー。楽しそうじゃね？」

無月「・・・こいつもバカか」

作者「なっ！作者にむk」

秀哉「いやー諸君、御機嫌よう。この小説の主人公の高町秀哉様だ！！

ハッハッハー！ー！！」

無月・作者「・・・（うわぁー・・・）」

秀哉「どうしたんだい？愚民ども」

無月「チッ・・・おい作者、俺の武器はどうやって出すんだ？」

作者「ん？ああ。お前の影に出したい物を頭に浮かべながら手を突っ込んで

「来い」って出したい物の名前を言えば出せるよ」

無月「そうか・・・来い・・・斬月!!」

グワッ!!

秀哉「な、なんだその馬鹿デカイ刀は!」

無月「こいつは斬魄刀っていうんだよ。いくぜ。卍解天鎖斬月。
ぶっ飛べ、・・・月牙天衝!」

秀哉「え、ちよっ・・・う、うわああああー!!!!!!」
ドッカーン

無月「・・・(やっぱ刀はいいなノノノ)」

作者「・・・(さすがモブキャラ。扱いが・・・)」

無月「それでは、この小説を読んで下さっている読者様、続きはまた今度で」

作者「え!それは俺のセリフー!!!!!!」

無月「早い者勝ちだよ。毗篋夢さん」

作者「んー。ならしょうがないな。では、また今度――」

設定（キャラ紹介等）（後書き）

次回から本編に突入します。

原作を知らないので、原作崩壊引き起こしていきましょう！

転入生（前書き）

どーもー。全く読まない小説の書き人眦篋夢です。
今回はタイトル通り、無月の転入日です。

転入生

無月side

(着いたか・・・)

そこは一室の部屋だった。

「まずは自分の能力をh」「ハローッ」・・・」

「実はねえ実はh」「どうせデバイスのことだろ？渡されていてねえし」
「・・・」

「むう~~~~まあいいけど。はい、これデバイス名前はアルフィンでユニゾンデバイスだからね」

「・・・ああ」

「あなたが私のマスターですね。私の名前はアルフィンです」

「あー。マスターじゃなくて無月。俺の名前は冷氷 無月だ」

「了解しました。マスター無月」

「・・・無月だけで呼べよ」

「それじゃ私帰るねーばいばーい」

「あーはいはいばいばい神様(幼女)」

「・・・・ナニカイツタカシラ？」

「・・・・何も言っていないです（汗）」

「さて、アルフィン学校に行くか」

「はい」

なのはside

今日は学校に来た時からいつもより少し賑やかだった。

「すずかちゃん、アリサちゃんおはよー」

「おはようなのはちゃん」

「なのはおはよー」

「ねえ今日ってみんな騒いでいるけど何かあるの？」

「転入生だってよこの学年に二人も」

「男の子かなー？女の子かなー？」

ガラガラガラ

「はい。みんな静かにー・・・よし。

今日はこのクラスに男の子の転入生がやってきます」

生徒A「先生質問です！。その人はカツコイイですか？」

「うーん。かつこいいんじゃないかしら」

全員「おーーう」

「じゃあ冷氷君入ってきて」

コツコツコツコツ

「今日隣町から引越してきた冷氷 無月です。質問等は一切受け付けません

人付き合いは苦手なのであまり関わらないでくださいよろしくお願いします」

生徒B「おお、これは・・・／／／」

生徒C「なんか、Cool!!」

「では、無月君の席は・・・高町さんの隣ね。
分からないことがあれば、高町さんに聞いてね」

「分かりました」

「わ、私なのは、高町 なのはって言います」

「・・・ああ、よろしく」

(こいつ俺の今の自己紹介聞いてなかったのか?)

なのはside

（無月君こんなに露骨に嫌わなくてもいいのに）

・席について早々なのはから遠ざかる。

・なのはのことを無視（寝ている）。

・起こそうとしたら「うるさい」って言われるし。

（……はぁ（落ち込み中））

無月side

（なんなんだよこの魔王。俺の自己紹介マジで聞いていなかったのか？

滅茶苦茶つかかってくるじゃねえかよ……ハア」

「無月君……無月君……」

（うるせえ……先生さんこいつをなんとかしてくれ……」

「ん？高町何を話している」

「ふえっ！いいえ、何でもありません」

「そうか……だったら金、銀、銅、水銀の化学式を答えろ（ニヤニヤ）」

「えっ！えつと……」

「……（カキカキカキ）」

スッ・・・

「え、無月君これを言えればいいの？」

コクッ

「どうした高町答えられないのか？」

「えっと・・・金 $\equiv$ Au、銀 $\equiv$ Ag、銅 $\equiv$ Cu、水銀Hgです」

「！！・・・いいだろう、座ってください」

「無月君、有難う！」

「有難うと思うなら、俺に関わらないでくれ」

「え・・・ごめんね」

「スースー（なんか高町の髪が垂れ下がった気がするぞ）」

（けど・・・私負けない！！）

理科の授業中でした。

転入生（後書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「どうした？」

無月「あの高町とかいう奴を俺に近づけるな！そのせいでオチオチ眠れやしね

え！！」

作者「あーそれは無理」

無月「なぜ！？」

作者「だってさ、一応原作キャラの女性ほとんどお前にくつつけるし」

無月「・・・・・・・・・・は？」

作者「ってことでまた今度〜」

無月「おいテメエーーーー！！！」

アリサの怒りと敗北（前書き）

無月「・・・なあ作者」

作者「ん？」

無月「このタイトル不味くね？」

作者「まあタイトルだけだし気にしないでいいんじゃない？」

アリサの怒りと敗北

無月side

（畜生、なんなんだよあの高町とアリサっていうやつ（イライラ）

~~~~~回想~~~~~

4時間目が終わり、人々はみな、思い思いに御弁当を広げるのであった。

「なのはー御弁当どこで食べる？」

「教室？それとも屋上？」

「私は屋上まで行くの疲れるから教室がいいな」

（魔王と友達かける×2か・・・こいつらは教室で食べるらしいからな・・・

俺は屋上で食べるか」

ガタッ コツコツコツコツ・・・

なのはside

「・・・・・・・・・・はあ」

「どうしたの？なのは」

「いや、何でもないんだけどね・・・」

「無月君の事？」

「うん・・・理科の時間に助けてもらったから有難うっていったんだけど・・・」

「だけど？」

「「有難うって思っただったら俺に関わるな」って言われて」

「はあああ！！何あいつサツィテーーーー！！！！」

「ちょっとアリサちゃん。そんなに怒らないでよ」

「いや、私あいつぶっ飛ばしてくる」

ガタッ！ タッタッタッーー

「あ！アリサちゃん！！」

「すずかちゃん追おう！」

「うん！」

~~~~~回想終了~~~~~

無月side

ここは屋上の端の方のベンチ

一人の少年が弁当を食べていた。

（ふうー。ようやく一人になった。今日は帰ったら能力テストだな）

そう思つて、食べ終わった弁当をかたずけていると。

バンッ！！

勢い良く屋上のドアが開かれた。

「あんたがなのはに酷いことをっ！！」

アリサは無月に殴りかかった……が、

「え？」

そこに無月は居なく、いつの間にかアリサは宙をまい地面に落ちた。

ドンッ！！

「うつ……」

「なんだ……誰かと思えばバニ……女か」

「くっ、バニングスよっ！！（全く見えなかった!?）」

「はぁ……面倒だな……（これが武道の心得か……）」

「「アリサちゃんっ!」!」

アリサ side

(なによコイツ。殴りかかったときには目の前に居たのに気づいたら私が地面に叩きつけられて、あいつは私の後ろにいた)

「はぁ・・・面倒だな・・・」

(コイツッ!)

「「アリサちゃんっ!」!」

「なのは!すずか!どうして二人がここに!」?

「どうしてってアリサちゃんが無月君のところに走り出したから」

「コイツは・・・私がやる!」!

無月 side

「コイツは・・・私がやる!!」

（はぁ・・・やべえ・・・斬りたくなってきた・・・これ以上は無理だな）

「お前たち。俺は自己紹介のとき言ったよな、関わるなって・・・」

「だったらなによ!」

「ちよつとアリサちゃん!」

「はぁ・・・まあいいや。・・・興ざめだな」

コツコツコツコツ

「!ちよつと、逃げるの!??」

「俺に一撃でも入れられなかったやつがよく言つな。
咬み殺すよ」

「くっ・・・」

「じゃあな」

「待って!!」

なのはside

「だったらどうしたら私たちとお話してくれるの？」

「ちょっとなのは！こんな奴ほっとけばいいのに！！」

「・・・だったら、魔法でも使って俺を負かしてみな」

コツコツコツコツ

（魔法！？そんなの・・・）

無月side

俺は正直うんざりしていた、

高町は俯き、バニングスは睨み、月村はチラチラ窺っていた。

そして下校時間

（さてと、さっさと戻って能力テストだ！！）

そして、無月が自宅で能力テストをしている頃、

なのは小さな宝石を携えたフェレットと出会っていた。

なのはがフェレットと出会い、

そして

この物語は

動き出す。

変態登場！？（前書き）

作者「なあ無月」

無月「・・・なんだ」

作者「安心しろよ。前話の後書きにも書いたが、

ちゃんとアリサとのフラグ立てるからな（キラキラ）」

無月「・・・ナッツ、カンビオ・フォルマ

ダブルイクスパーナ
XXBURNER!!」

作者「えっ!!」

変態登場!?

無月side

「なあアルフェン」

「なんですか無月」

「俺の能力ってさ、お本当にチートだな」

「そう……ですね」

俺たちは今、近くの林に結界を張って
その中で能力テストをしている。

「やっぱボンゴレはいいよなー」

「無月?」

「いや、何でも無い」

今俺が使っている武器は……

(大空のリングVer.X……これは凄まじい炎だな……)

「ガウツ」

「ナッツ、カンビオ・フォルマ モード・アタック

ミテ・ナ・ディ・ボンゴレ・プリーモ」

「ガウツ!」

「え、ええええー!!!猫ちゃんがガントレットに!?!」

「あー、まあこういうものだから気にするなアルフィン」

なのはside

「これが……魔法」

「そうだよ、そして君には魔法使いの才能がある。
僕のために力を貸して欲しい」

そしてここでは、未来の魔導士エース

高町　なのはとそのデバイスレイジングハートが揃った。

無月side

（ふむ、何事かと思えば、高町が魔法使いに目覚めたか・・・）

「無月さん、取り敢えず道路とかを元に戻したほうがいいかと・・・」

「そう・・・だな。来い、タイム風呂敷——！！！！」

「・・・それはドラエム（それ以上は言うてはいけない！！）・・・」

「まあ、取り敢えず直すか」

なのはside

（この魔法を使えば無月君に話を聞いてもらえる・・・
まっってね！！）

決意を新たにしたなのはだった。

無月side

今は学校、と言っても俺は寝ている。

（・・・よし、早退しよう！！）

思い立ったが吉日という訳で荷物を整理していると・・・

「無月君！ちよっとお話があるの・・・」

「……………何のようだ」

「この前……屋上でした約束のこと覚えてる？」

「……ああ、お前が魔法でも使って俺に一撃でもあえたらお話してやる

っていう内容だったな」

「約束は守ってね」

なのはは真っ直ぐに見つめてくる。

「ああ、約束は守る」

そして俺は帰ろうとしたのだが、

「って！無月君！なんで帰ろうとしているの！？」

「暇だし、眠いし、面倒だから」

「でも、帰っちゃだm「いいわよそんな奴」あ、アリサちゃん！？」

「別に帰りたければ帰らせればいいじゃない」

「ちょっとアリサちゃんs「お前の指図なんていらねえ俺は俺で勝手にする」

無月君まで何言っているの！」

そして無月は早々と教室から出ていった。

「無月君・・・」

なのは何か呟いていたが、無月の耳には届かない。

無月は帰宅途中にある公園のベンチで考え事をしていた。
それは、ジユエルシード集めをすぐに開始するか、
それとも、戦闘能力をあげる訓練をするか
という内容だった。

「ん？これは魔力反応か、月村とか言う奴の方から・・・
ジャミングコートを着れば戦ってもばれないだろ」
そして無月は目的地へ向かった。

なのはside

なのは達の前にはジユエルシードを持った黒い格好の
少女と使い魔らしき人物がいる。

「そ、そのジユエルシードを渡して！」

「これは、私たちに必要なもの・・・だから渡せない」

「それは危険な物なんだ渡してくれないか？」

「誰がアンタ達何かに渡すものか！！」

「なのは！俺も手伝うぜ！！」

私とユーノ君の前に見た目はカッコイイけど、
何か目がいやらしい男の子が出てきた。

「俺の名前は高町 秀哉だ同じ高町どうし仲良くしようぜ」

（ねえユ一ノ君）

（何？なのは）

（知り合い？）

（全く知らない）

「ちなみに俺様の魔力量のランクはSSSだぜ！凄いだろー！！」
「「「SSSS!？」」「」」

なんか凄いけど目線がいやらしくて
嫌な感じの男の子が現れた。

月無side

（さて・・・フェイトがなのはとの仲が良くなるまでは
ボンゴレギア（VG）で戦って、その後ハヤテが仲間になるまでは
刀で戦うか・・・）

「ん？アルフィンなんだあの高町の近くにいるSSSランクの魔導士は」

「分かりません、先程突然現れました」

「チツイレギュラーか・・・あいつ、フェイトに攻撃していやがるな」

「どうしますか？無月」

「もち」

無月はリングと毛系の手袋を装備した・・・

「さあ、初陣だ!!」
「はい!」

???

「くうっ!」

「フェイト!!」

（私の前に現れた目線が気味悪い男の子は正直
魔力の使い方は悪いけど、魔力が高くて一撃が強い!）

「フェイト大丈夫かい!？」

「うん、まだ行ける。バルディッシュ!」

そのとき私はあの男の子から目を離してしまい
気づけばあの子が撃ってきた魔法弾が私に当たるところだった

「フェイトー!!」

（やられる!!）
思ったそう。けど、どこも痛く無かった。
ゆっくり目を開けると・・・

「ッ！テメエーは誰だ!!」

「俺の名前？そうだな・・・ボンゴレとでも名乗っておこう」

無月side

（あつぶねえ・・・もう少ししてフェイトに当たるところだったじやねえか）

「おい、テストロッサ怪我は無いかな？」

「え・・・はい。怪我は無いです。助けてくれてありがとう」

「デメエ・・・俺の邪魔をすんのか？」

「ああ俺にとつてはお前みたいな変態は手に取る程じゃないが、まだテストロッサには早いのでな」

「おいお前！フェイトがあんな餓鬼に負けるとでも言うのかよ!？」

「餓鬼？あいつはテストロッサと同じ年だよ」「消えろーーーーー」

「ー!!」「チッ」

あの変態がいきなり斬りかかってきやがった。

「まあいいか。行くぞ変態」

「デメエ・・・殺す!!」

そして、変態（秀哉）VSボンゴレ（無月）の戦いが始まった。

無月はリミッターで魔法ランクEX↓Dまで落としている。

秀哉はリミッターは付けてないためSSS（付け方が分からない）。

変態登場！？（後書き）

無月「あの変態め・・・」

作者「あれ？お前もしかして、フェイトにほ」

「極限サンシャインカウンターー！！」

ふぎやあああー！！・・・」

無月「ではではさよならーの前に、

どうやらこの作者は課題やら仕事に追われるため
更新日時が遅くなります。では・・・」

無月・作者「良いお年を～～」

なのは・フェイト（私たちっていつになったらここに出れるのかな？）

無月VS秀哉（ボンゴレVS変態）（前書き）

作者「いやー前話ではいきなり斬りかかれて正直驚いたねー」

無月「別に・・・あいつ動き遅かったし」

作者「まあお前の設定がモロにチートだからなー」

無月「・・・（こいつが考えたんだよな）」

無月VS秀哉（ボンゴレVS変態）

無月side

「・・・おせえな」

（なんだこの変態。魔力が馬鹿デカイだけで戦術のパターンが少ない上に

直線的な攻撃に雑な剣術・・・舐めているのか？）

今はボンゴレ（無月）と変態（秀哉）が戦っていた。

（魔法弾と剣。少しは楽しめると思ったのだがな・・・）

「どうだああー！ーこの俺様の力わよおおー！ー！！」

「黙れ変態。・・・そうだな、そろそろ飽きてきたしな・・・」

無月がそう言うのと、毛糸の手袋が光り輝き、赤が重視されたグローブに姿が変わった。

「おい、テメエ・・・なんだそのグローブ」

「俺の武器だよ。変態」

「チッ！！」

（相手の剣は・・・なぜに金色なんだ？）

そう、変態の剣は金色だった。

「死ねえええ——！！」

「・・・「こいつ弱いな」」

なのはside

突然現れた黒いコートを着た少年。

魔力はあまり感じられないけど、すごく強い。

（凄い、魔力の差が物凄くあるのに、秀哉君を圧倒している！？）

「負けられない・・・私たちもはじめよう」

そして、私は私の戦うべき相手と向き合った。

無月side

「お前弱いな・・・（今の俺くらいまで魔力落としているんだけどな）」

「チツツツ！！！」

（なんなんだよこいつ！魔力は明らかに少ないのになんだよこの強さはよ！！）」

「向こうも終わったみたいだし、そろそろいいかな・・・」

「この俺が主人公！俺が最強なんだよ！！俺は負けないんだよ！！！」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

「ッ！！！！」

秀哉side

（見えなかった）

俺様は強い、この強さでなのはやフェイト、はやてといったかわいい子たちを

メロメロにして俺様の虜にするつもりだった。

(それなのになんなんだよこいつ、強い、強すぎる!!！)

「この俺が主人公！俺が最強なんだよ!!！」

「そうか・・・なら終わらせるぞ」

そうあいつが言い放ったとき、俺の目の前からあいつの姿は無かった。

「ッ!!!!！」

そして、目の前が真っ暗になった・・・。

フェイトside

「・・・凄い」

(私のソニックフォームの最高速度を軽く越してる速度で、相手の後ろに回り込み、

的確に相手の意識を剥ぎ取っている!?)

「どうやら勝てたみたいだね」

「ふえ！あ、はい／＼／」

いつの間にかフェイトの隣にボンゴレが居た。

(驚いて変な声出しちゃったよ／＼／＼／)

「まあいいよ、それじゃ俺は帰るから。体に気をつけるよ」

「え・・・はい、ありがとう」

そう言うと彼は少し微笑んで？消えた。

（一体なにものなんだろう？どうして助けてくれたのかな・・・？）

無月side

家に帰宅後・・・

「今日は大変だったなアルフィン」

「何言ってるんですか無月。私今回の戦闘でなにもしていませんよ」

アルフィンは少し拗ねてる。

「別に今日の相手は弱かったからね」

「そうですね、魔力だけ有っても効率良く使えないのであれば宝の持ち腐れですね。秀哉という人にピッタリです」

「・・・なあアルフィン」

「なんですか？」

「お前怒ってるだろ」

「・・・い、いえ」

（・・・今の空白の時間はなんなんだよ！？）

少し怒っているアルフィンでした。

「あ、そうだ！」

「どうしましたか無月？」

「おーい可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様出てきてくださーい」

「？出てくるわけな「呼んだー？」・・・ありましたね」

「実はさ少しだけ能力を追加して欲しいんだけどいいかな？」

「いいよー。この可愛くて、優しくて、美しくて、綺麗な神様に
お願いしてみなさい（エッヘンツ）」

「……………じゃあお願いなんだけどさ……………」

そして俺のチート能力が増えた。

「てか、意外と簡単に能力追加してくれたな」

「良かったですね無月」

「まあこれで俺が負けることなんてあまりないだろ」

「…………（まず、攻撃くらうのですか？）」

~~~~~結果~~~~~

無月VS秀哉……………勝者：無月

なのはVSフェイト……………勝者：フェイト

~~~~~

「そおいえば、アニメや漫画の能力フル活用できる時点で、別に頼
まなくても

能力発動出来たんじゃね？」

「…………無月さん…………（今頃ですかぁ…………（疲））」

無月VS秀哉（ボンゴレVS変態）（後書き）

無月「弱かったなーあの変態」

作者「まあ能力無しの変態で、魔力バカを目指したからね」

無月「ふーん・・・何か酷いな」

作者「黙れ、このフラグメイカーめっ！！」

無月「・・・ルーン文字ハカノッ！！」

作者「あぢいいいいーーーーー！？」

ルーン文字ハカノッは松明「炎を示します。」

なのはと無月 はじめの出会い（前書き）

作者「なあ無月」

無月「なんだ」

作者「なんでさ、せつかくのユニゾンデバイスなのにアルフィン
人の状態にしないんだ？」

無月「分からないのか？どうせお前が俺とくつつけようとするから
だろ」

作者「・・・（やべえ、ばれてる（汗））」

なのはと無月 はじめの出会い

無月 side

「温泉？」

教室でいきなり話かけられたと思ったら

高町に「温泉に行こうと誘われた」。

「いや、俺はいい。それに俺はその日予定がある」

「え、そうなの・・・ごめんね忙しいのに」

「・・・・・・」

俺は未だに高町のことを理解できなかった。

いや、理解したくなかった、しなかったの方が正しいだろう。

（それに、温泉ってことはフェイト達と遭遇するわけ・・・か）

キンコンカーンコン

「本当は温泉に行った先でも会うのだから・・・」

俺の呟きは誰の耳にも届かなかった。

なのは side

~~~~今は御弁当タイム~~~~

「なのは！どうしてあんな奴を温泉に誘ったりなんてしたのよ!？」

「アリサちゃん落ち着いて」

「落ち着いてなんかいられないわよ！私はいつが嫌いなの！！」

「私は嫌いじゃないんだけどな・・・」

「なのはちゃんは無月君のどこがいいの？」

「・・・うん、ちよつとね。うち、私がまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で

大怪我しちゃってしばらくベットから動けなかったことがあるの。

喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかったから、お母さんとお兄ちゃんは

いつもずっと忙しくてお姉ちゃんはずっとお父さんの看病で、だから私割りと最近

まで家で一人にいること多かったの。そんな時に無月君と出あったの」

「ん？ちよつと待つて。あいつは最近になって転校してきたのよ。

なんでそんな奴と出会ったの？」

「うん、それはね・・・私がその頃、家に居ても一人だったから公園で遊んでいたの、

その時にね足をくじいて動けなくて、辺りも暗くなって、一人で泣いていたの。

そんな時に無月君と出会ったの」

「初めは怖かったけど、心配してくれて、優しくて、それだけで安心できて、

私はいつの間にか泣き止んで、笑っていたの」

「・・・」

「そして、泣いていた理由を聞かれて、答えたの」

「それで、あいつはなんて言ったの？」

「「一人で抱えこまなくていい。一人で悩まなくなってい。人は独りでは

生きてはいけないんだから。お父さんの怪我が治ったらいっぱい甘えなっ！」って

私はその言葉を聞いてまた泣いちゃったんだけどね。私が泣き止むまで傍に居てくれて

その後家まで送ってもらったの」

「ふーん。昔はあいつそんな奴だったんだ・・・今じゃ考えられないわね」

「でも、元はいい人なんだよ！きっとその後何かあったんだよ・・・

」

「そっか・・・」

だから、私はあの約束を受け入れて、「「お話」」をさせてもらっただから！！！！

無月side

「くしゅん！」

「無月かぜでもひいたのですか？」

「いや、そんなわけないのだが・・・」

（なんて言うか嫌な予感がしたというか、寒気がしたというか・・・）

なんだかんだで意思疎通？ができている二人であった。

「そっか・・・もうすぐで温泉イベントがあるのか・・・」

「いきたいのですかマスター？」

「マスターは止せて・・・いや、その温泉に行った先でテストロツサと高町

がエンカウントすんだが、多分あの変態野郎も出てくると思うし、もう少しV.Gの扱い方を正確にしておこうかな」

「ふふっ・・・まあマスターならなんとかかりますよ。っということとは

マスターも温泉に行くのですか？」

「・・・アルフィン・・・そこまで名前で呼ぶの嫌だったのか・・・。  
温泉にいくと言っても、あいつらと遭遇するようなへまはしない。  
それに変態と戦えば、今の高町やテストロッサでは勝つのは難しい」

「だからマスターが戦う・・・と。」

「・・・（もう、突っ込まん）」

「いいのではないですか？」

「え？」

「それがマスターのやりたいことならいいのではないのでしょうか」

「・・・ありがとなアルフィン」

「いいえ」

（それにしても、あの変態と戦ったとき、グローブのVerをXではなくVに

しておけば奥の手に出来たんだがな・・・少し失敗したな）

「まあいい。戦いの時まで俺は武器の使用チェック等をする」

「かしこまりましたボス」

「・・・もう好きに呼んでくれ（涙）」

「では、ダーリン「それは無理だ」ええー・・・」

「名前かマスターにしてくれ・・・」

「ではご主人様で♪」

「話を聞けーーーー！！！」

なのはと無月 はじめの出会い（後書き）

作者「・・・何かアレだな」

無月「ん、なんだ？」

作者「お前の予定の性格がずれてきているなあって」

無月「・・・（ブチッ！）頭・・・冷やそうか」

作者「・・・（；ω；）」

## 無月の怒り（前書き）

作者「……………」

無月「どうした？今日はやけに静かだな」

作者「いや、次のバトルでどんな装備を使わせるか迷っていてな」

無月「！お前がそんなまともなことを考えていたとは！！」

作者「……………バカにしてる？」



「ママー変な人が居るよ」

「こら、見てはいけません!」

(はぁ~~~~愛しの人達の・・・ふふふ・・・)

変態は、どこに行っても、変態だった。

なのは・フェイトside

(何か今ものすごい~~~~く悪寒が走ったんだけど・・・)

二人の脳裏に高町 秀哉の顔が浮かぶ

(結界張っておこう)

無月side

旅館の近くの林の一角

(そろそろか)

無月が目を覚ました頃には辺は暗くなり、  
ロストログアの反応と魔力の反応があった。

「アルフィン準備はいいか？」

「はい、いつでも」

「行くぞ!」

そして、無月の手袋の形が変わった・・・

フエイトside

「うつ・・・」

「フエイト!？」

最初は誰も居なくて順調にことを運んでいたのに、

また、この前と同じ嫌な目線のこと、白いアジャケットの女の子、その子の使い魔らしいフェレットが現れ、ジュエルシードの封印を邪魔されてしまった。

「なあフエイトちゃん」

嫌な目線の男の子が話かけてきた

「君が僕の物になれば、ジュエルシードをあげるよ」

「!？」

何・・・言っているの、あの人は・・・目線が・・・怖い!!

「フエイト!そんな奴の言葉なんか聞くな!!」

「黙れよ犬風情が」

男の子がそう言い放つとアルフの周りに魔法弾が・・・

「消えな」

「アルフ!!」

アルフが危ない!!そんなとき・・・

「さっきから黙って聞いていれば・・・お前ごとき雑魚が

調子に乗ってんじゃねえぞ・・・」  
「え？」

その瞬間。嫌な目線を送っていた男の子が地面に叩きつけられていた。

「がはっ!!」

無月side

(・・・この変態は・・・本当は斬りたいが、斬撃は闇の書のとくに使うから・・・今回は大地の力で地べたに這い蹲らせてやるよ)

「フェイト・アルフ大丈夫か？」

「!あんたはボンゴレ!? 助けに来てくれたのかい!？」

「ああ本当はもう少し早く来たかったんだが・・・ちよつとな」

寝ぼけて遠回りしてしまったとは言えまい。

「テメエ・・・ボンゴレ・・・俺様の邪魔を・・・」

「フェイト」

「は、はい!」

「あんな奴の言うことをまに付けるな」

「え？」

「まあいい・・・お前は向こうの白い奴女子と戦ってこい」

「う、うん。行ってくる」

「ふっ・・・頑張ってこい」

(ミスったー!。フェイトって呼んじまった・・・。まあいいか、

あいつも別に気にしてないだろ。それはともかく・・・)

「さて・・・ここから先は一方通行だ。  
俺を倒してみな」

・・・俺ってアクセラレータになれるんじゃない？

フエイトside

(どうしてあの黒い服を着た男の子は私たちを守ってくれるのかな？)

「ねえ、アルフ？」

「さっきの黒服の男の子のことかい？」

「うん」

「あたしは信じるのはまだ早いと思う・・・けど」

「けど？」

「あのさっきの変態と今のプレシアよりはマシだと思うよ」

「うん・・・そう・・・だね」

お母さん・・・

「フエイト・・・私たちも戦うよ！」

「うん！」

なのはside

(やっぱり・・・私を感じていたあの嫌な視線は当たっていたんだ。  
私が・・・もし、襲われたら・・・あの黒服の男の子は  
助けて・・・くれるのかな)

「何考えてるんだろ・・・私」

「なのは、くるよ!」

「うん、わかってる。私達も戦うよユーノ君!!」

強くなる!そして・・・

「フェイトちゃんや無月君とお友達になるんだから!!!!」

## 無月の怒り（後書き）

無月「なあ・・・」

作者「ん？なんだいワトソン君」

無月「（あえてスルー）これさ、明らかに

フェイトのフラグ立てる気だよな・・・お前」

作者「ナンノコトカナ？」

無月「・・・ポイズンクッキング♪どうぞ、召し上がれ♪」

作者「え・・・ちよつ、おま・・・ガハッ」

バタッ！

作者は星々の仲間入りを果たしたのであった。

戦闘開始！～能力テスト～（前書き）

無月「さあーで、今日は能力テストも兼ね備えて、ちと暴れるぜ！」

作者「まあ・・・ほどほどに・・・なっ」

無月「~~~~~」

作者「（怖くて口出し出来ねええー）（；・）（）」

## 戦闘開始！～能力テスト～

無月side

「さあーで、最初から上げていくけどいいよな？  
まあ断られても上げるがな」

「はあはあはあ・・・」

無月は戦闘開始とともに大空のVGと大地のシモンリングを発動し、  
圧倒的な機動力で

秀哉を翻弄し、大地の重力で相手の機動力を大幅に削りとっていた。

「はあはあ・・・テメエ・・・なんだその力は」

「お前程度に教える義理はねえぞ雑魚が・・・」

「テメエ・・・調子に乗ってんじゃねえぞおおおー！！！！！！」

（遅いって弱い・・・そして脆い）

秀哉が突っ込んでくるが、大地の重力で地面に叩きつける。

「ガハッ！」

（はあ・・・そろそろかな）

「大空のVG・大地のシモンリング解除」

無月がそう呟くと、無月の手や太もも当たりを纏っていた防具と、  
額に灯っていた炎と秀哉を抑えていた重力が消えた。

（次はこれだな・・・）

「来い。瓜、開匣」

ボックスの穴に指輪から出ていた真つ赤な炎を注入した。

「ニヤウーン！」

「なっ!？」

カンビオ・フォルマ

「形態変化」

「ニヤアアア!!」

瓜と呼ばれた猫は「カンビオ・フォルマ」と聞くと、  
無月の左腕の武器の一部となった。

それは、荒々しく吹きあれる疾風と謳われた・・・

ジィのアーチエリー  
「Gの弓矢」

秀哉 side

おいおい、こいつはどういうことだ!？

いきなり猫が現れたとおもいきやあいつの武器になりやがったぞ!？

「おい・・・何をしやがった・・・」

「お前に教える義理はないと言ったる？

そして・・・これで吹き飛べ・・・」

あいつは、弦を引っ張り、溜めると・・・

トルネード・フレイムアロー  
「赤竜巻の矢!!!」

バカデカイ一撃が俺に向かって放たれた。

溜めが少し長かったため、俺はなんとかギリギリで回避に成功する

ことができた。

「ふっ。今の技は少しばかり溜めるのに時間がかかるんだね」

「そうだな。だったらどうした！」

果てる！ガトリングアロー！！」

数発の矢が俺に向かって放たれたが、

「ふっ。防御！！」

このぐらいの威力なら、俺のデカイ魔力を守りに回せば防げる。  
ニヤリ。つい、笑ってしまった。

「ああーわり、今のお前の顔見たらちとイラ付いたわ・・・

ねえ、変態・・・」

「ああ。なん」

「噛み殺すよ・・・」

俺が言い終わる前に言葉を遮られ、  
その瞬間あいつから、物凄い殺気が俺に向かって放たれた。

無月side

（やべー・・・ちと殺気出しすぎちゃったか？

まあいいや。あの変態のおかげでこっちは能力のテストが出来る  
んだからな）

「お前・・・死ぬなよ」

「・・・・・・は？」

俺はさつきとは色の違うボックスを出した。  
そして違う色の炎をまた注入した。

「おいでロール、開匣」

ボックスから出てきたのはハリネズミだった。

「クピ」

「ロール、カンビオ・フォルマ」

「クピーーーー!!」

「追加だ、シモンリング氷河・森!!」

そして俺は、鋭い葉と氷の葉を纏った。

「さあ始めようか。ワンサイドゲーム（一方的な虐殺）を・・・  
（まあ殺しはしないけどな）」

秀哉 side

なんなんだこいつ、最初はグローブ、次は弓、そして次は・・・

「なんだそれは・・・トンファーと防具と・・・お前が纏っているのはなんだ？」

「はあああー・・・お前さ・・・3度目だぜ」

お前に教える義理は無い」

そこからは凄かった。あいつは動いてもいないのに

俺の体は「何か」によって体中を切り裂かれる。

「ぐわああ!!・・・ぜえぜえぜえ・・・なんなんだよこいつ!・・・」

(攻撃が・・・見えねえ・・・)

「ふむ。遠距離は大丈夫だな。てか、マジ切れ味スゲー。・・・次はこれだ」

あいつはそう言い、トンファアを構える。  
その瞬間・・・

「消えた!?!」

「遅いよ君。・・・遅すぎる」

あいつは俺の懷に潜り込んでいた。  
そして物凄い速さで俺に攻撃を打ち込む。

「ガハッ!?!」

(こいつには・・・まだ・・・勝てねえ  
俺の・・・ハール・・・ム)

そして、意識が途切れた・・・。

無月side

(チッ!もう気絶したのかよ。かなり手加減したんだけどな・・・。  
まあある程度データもとれたし、次はヴァリアーリングを試すか・  
・)

「ん、向こうも終わったみたいだな」

「そのようです。マスター」

ふと、なのはとフェイトの方に目をやると  
フェイトとアルフが遠くに飛行していた。

「俺も変えるか。その言えば、孫悟空みたいに瞬間移動できるのか  
な？」

「試してみてはいかがですか？」

「あ、いや第8の属性の炎を使ってみる」

「第8の属性の炎？」

アルフィンに尋ねられたが、見せた方が早いと判断に、  
手を前に出し、

「開け」

そう呟くと、空間に穴が空いた。いや、炎によって作られた。

「行くか」

この場から立ち去ろうとしたとき

「あ、あのー！」

声をかけられた……………はあ

戦闘開始！～能力テスト～（後書き）

無月「……………（イライラ）」

作者「（ああ。相手が余りにも早めにのびちまったから  
怒っているなありや……………」

無月「はあ……………やりたりねえなあ……………」

作者「やっぱりかああ……………！！！」

番外編（前書き）

明けましておめでとうございます。

……\*Happy-New-

Year\*…

## 番外編

全員「新年明けましておめでとうございます」

アリサ「いやーもう2012かー」

すずか「なんか慌ただしい年だったねー」

無月「そうか？俺はのんびりやっていたけどな」

なのは「私も私もー」

作者「いいよなー小学生は・・・」

アリサ& amp ;無月「あぁん！！（怒）」

作者「し、しょうがないだろ！こっちは受験だし、仕事あるし  
課題だつて沢山あるんだからよ！！」

無月「それは冬休みに入って小説読んでいた時間8割はあるよ  
作者さんやい」

作者「・・・そ、それは・・・ねえ」

アリサ「自分がやらなかったからって小学生に当たらないでくれな  
いかしら！」

作者「（グサグサッ）」

作者のライフは312削られた。

無月「てか、8割小説読んでいるって・・・根暗か？」

作者「（グサグサグサッ）」

作者のライフは864削られた。

作者「いいもん、いいもん・・・グスッ」

アリサ「・・・そんなだから彼女ができないのよ」

ドッカーーン！！

作者にクリティカルヒット。作者のライフは3648削られた。

作者は死亡した。

アルフ「なにしてるんだい？」

作者「アールフー！！！」

ぎゅっ

なのは・アリス・すずか「「「あああ！！！！」」」

アルフ「ちよっと！何するんだい／＼／」

作者「うっうう。アリサと無月がオラをいじめるんだべさ」

無月「・・・（だべさ!?!）」

アルフ「おーそうかいそうかい。よしよし」

作者「アルフリーー!!!」

無月「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

ウェニアント・スピリトゥス、アエリアーリス・フルグリエ  
ンテース

（来たれ雷精、風の精）

クム・フルグラティオーニフレット・テンペスタース

（雷纏いて吹きすさべ）

アウストリーナ ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス!!

（南洋の風）【雷の暴風】！

ドカアアアーーーーー!!!!!!

なのは・フェイト「・・・・・・・・・・」

無月「ふーん。まあこんなもんだろ」

作者「ああ・・・アヴァロン・・・よ・・・・・・・・・・」

なのは（年末そうそう大変だったの）

アリサ（さすがは原作崩壊作品ね）

作者「それでは、皆様！今年度も~~~~」

全員「良いお年をーー!!!」

## 番外編（後書き）

今年もよろしくお願いします。

## 少しの会話（前書き）

無月「そういえばさ、俺って修行したら自分固有の技とか  
習得出来るのか？」

作者「ああ。できるぞ」

無月「そう……か」

作者「……？」

## 少しの会話

なのはside

負けた。またあのフェイトちゃんに負けた。

名前は教えてもらったけど、私の名前は聞かずにどこかに行っちゃった。

「・・・」

「なのは・・・大丈夫？」

「ユーノ君・・・うん・・・私は平気」

穏当はかなり落ち込んでいる。フェイトちゃんには負けて、ジユエルシードは取られ、名前は聞いてもらえなかった。

（私どうすればいいんだろう・・・）

ドゴオオン！！

そんなとき、別の方から大きな音が聞こえた。

どうやら、男の子同士の戦いも終わったみたい。

途中から現れた男の子が立っていた。

「なのは、あの子からフェイトについて何か聞いてみよう」

「え、う、うん。分かった」

私は急いで彼の元に向かった。

「あ、あの！！」

なんとか、彼がこの場から立ち去る前に話しかけることができた。

無月side

「あ、あの!!」

俺はこのとき嫌な予感がした。そのまま無視して転移してもよかったのだが、

その後が面倒になるかもしれないので話を聞くことにした。

（はぁ面倒だな・・・）

そう思いつつも、

「なんのようだ？」

なのはside

話かけたのはいいけど、聞きたいことが沢山あって私は戸惑ってしまった。

「え、えっと・・・あ、・・・えっと・・・」

「ねぇ君」

「ゆ、ユーノ君!？」

「君のその力はなんだい？魔法ではないようだけど」  
「ん？ああこれのことか」

そう言つて彼は両手の指輪を私たちに見せてきた。

「それはなんだい？」

「別に。お前には関係ないよ」

「あ、あ、あ・・・あの!!!!」

無月side

（ああーだりいー！。早く帰って次使う武器を確認したいんだけどなあ・・・）

そんなことを考えていると。

「あ、あ、あ・・・あの！！！」

いきなり高町が大声で怒鳴った。

「え、えと、大声出してすみません！」

「別に気にしてない」

（謝るんだったら早く帰らせてくれ）

「わたし、私高町なのはって言います！」

あれ？自己紹介まだしてなかったっけ？

「あなたはボンゴレさんでいいんですか？」

「ああ俺はボンゴレだ」

まあ偽名だけだな。

「ボンゴレさんはなんでフェイトちゃんを助けているの？」

「それは簡単。あの変態から守るため」

そして俺は気絶している（笑）秀哉（変態）を指さした。

「そうなの・・・だったら、ふえい「フェイトのことが知りたければ自分であの子に聞きな。それが無理なら諦めな」貴方はフェイトちゃんの何を知っているの?」

「うーん。ぶっちゃけ、ほとんど全部知ってる」

「えっ・・・」

「でも、それは俺の言うべきことではない。君が心から何かを望み、行動すれば

自ずと答えは見つかる」

そろそろ潮時かな

「え、それってどういうk「じゃあな」あっ!ちょっと待って・・・」

そして俺はゲートをくぐった。

「・・・マスター」

「どうしたアルフィン」

「やはりマスターは優しいんですね」

「・・・俺がか?・・・」

「くすっ・・・」

なのはside

「行っちゃった・・・」

「それにしても彼・・・ボンゴレのあの力は一体何なんだ」

何か、ユーノ君がぶつぶつ呟いているけど、

私はそんなことより

ボンゴレ君を・・・フェイトちゃんをもっと知りたいと思った。

「それにしても彼は一体どうやって、どこから動物を召喚し、どうやってそれらを自分の武器に変換して装備しているのだ？」

今のユーノ君

正直……怖い。

秀哉 side

「ん……はっ！俺はどうしていた」

俺は驚いて立とうとしたが

「ツツツ!!」

身体中が傷だらけで、座り込んでしまった。

「あのボンゴレとか言う奴のせいか……あのやろう……  
今度あった時こそ……殺す!!!」

そしてその時こそフェイトとなのはをこの手に……ニヤッ

「つと、傷治さないとな……ウイルス」

「なんのようだ」

「おいおい、マスターに向かってその口調はないだろ」

「少なくともボンゴレみたいにデバイス無しであそこまで強くなれたら

考えてやる」

「そっかぁーデバイス無しでかぁー……って！デバイス無し！？  
あいつ、今までデバイス使って居なかったのかよ!？」

「ああそうだが」

（デバイス無しでこの強さ・・・あいつやっぱり・・・転生者か）

まあ転生者がなんだろうが、俺のハーレムの邪魔をするなら潰すまでだ！！

## 少しの会話（後書き）

無月「なんだ、あの変態まだハーレム夢みていやがるのか」

作者「まあ俺が残念系で設定しているからな（´・ω・\*）」

無月「・・・（こいつは酷いな）」

作者「何か言ったかい？」

無月「・・・別に」

すれ違い（前書き）

無月「・・・・・・・・」

作者「お前が悩んでいるなんて珍しいな」

無月「まあな・・・・・・・・ちょっと・・・・・・・・な」

作者「まあ俺にはあんましわからないが、とにかく頑張れよ」

無月「ふっ・・・・・・・・すまんな」

## すれ違い

無月side

「いい加減にしなさいよ!」

俺はその大声で夢から覚めた。

「この間からうわの空でボートして」

「ごめんねありさちゃん・・・」

「ごめんじゃない!あたし達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボートしてなさいよ!!いくよすずか」

教室から出ていくアリサ。

「あ、アリサちゃん・・・あ、なのはちゃん」

「いいよすずかちゃん今のはなのはが悪かったから」

「そんなことないと思うけど、」

取り敢えずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話してくるね  
「ごめんね」

アリサを追いかけるすずか。

「怒らせちゃったな・・・ごめんね。アリサちゃん」

「・・・高町はそれでいいのか?」

「え?」

「確かに、どんなに仲のいい親友同士でも、隠し事ぐらいは1つや2つは誰にでもある」

「・・・」

「でもさ、俺は、それはそれで良いと思うよ」

「・・・？」

「高町達は親友同士なんだろう？大切な友達なんだろう？そんな仲が隠し事ぐらいで

ぐらいで壊れたりするわけないだろう？どうせバニングスのことだ、高町が自分の話を聞いていないことよりも、自分たちに相談してくれない事に怒っているんじゃないかな？例えばぐうとかから始めて、自分の気持ちを伝えないよ。大事な友達なんだろう？もし、話しくいことなら、もう少し待つてほしいとか言つて謝つてこいよ。お前らしくねえぞ」

「無月君・・・うん。分かった。ありがとう」

教室を出ていく高町

「ふう・・・俺つて案外お人好しなのかもな・・・」

「そうだと思いますよ、マスター」

なれねえことはしない方がいいな・・・。

・・・よし、家に帰るか。

そして、身支度を整え始める。

（まだ昼過ぎか・・・公園で昼寝でもするか）

（あれ？いつの間にか暗く・・・って！

確かこの時期は街中でジュエルシードが暴走するイベントが！くそっ・・・間に合えよ！..」

フエイトside

「止まれ・・・止まれ・・・」

「フエイト!!」

私がこのジュエルシードを止めないと・・・  
母さんのために・・・母さんのために・・・

「フエイトよしなつて!フエイトの体が!!」

「全く・・・お前はバカだな」

「・・・え?」

「あんたは!?!」

そう、また彼だったいつも私を助けてくれる人。  
いつの間にか傍にいて、いつの間にか居なくなっている。  
そんな・・・人・・・。

「俺も力を貸してやる」

彼はそういい、私の手に手を重ねて着た。

「「止まれ止まれ止まれ止まれ!!」」

そして、ジュエルシードの光が納まっていく・・・

「良かった・・・た・・・」

私はそこで気を失った。

無月side

あつぶねえーてか、ついたときにはジュエルシールドが暴走してたし。

「おっと」

多分疲れたんだろうな。

気を失ったフェイトを支え、頭を少し撫でてからぞくに言うお姫様抱っこをした。

「アルフ！早く俺をお前たちのアジトへ案内しろ」

「お前、何ってるんだい！」

「大丈夫だ、フェイトの怪我は俺が治す」

「そんなの信じれるわけないだろ！」

「俺はフェイトの敵ではない」

「……あんたの言葉、信じるからね」

アルフは俺とフェイトと共に転移魔法を使った。

そして俺とフェイト、アルフはフェイト達の部屋にやってきた。

「ねえ、あんたにはフェイトの怪我を治せるのかい？」

「まあ見てな」

俺はそう言い。両手を掲げ……

「サイフォジオ！」

「ちよつとアンタ！フェイトを殺すつもりかい！？」

まあ始めて見る人はみんなそんなことを言うだろうが……

「違うこれは治癒魔法だ。まあみとけ」

そして俺はフェイトに向けて両手を振り下ろし、その癒しの剣はフェイトの傷を治していった。

「す、すごい・・・」

「この魔法は怪我だけじゃなくて、日頃の疲れも少しばかり回復させる効果があるから、フェイトにはピッタリの治癒魔法だ」  
「アンタそんな魔法が使えるのかい!？」

「まあね。けど、魔法は万能ではない。ちゃんと休ませないといずれは大きな事故に繋がるかもしれない」

「うつ・・・それは分かっている。分かっているけど・・・」

「お前たちにも人にはいけないことがあるんだろ？」

別に無理して話さなくてもいいよ」

「そうか・・・ありがとね」

「ふっ・・・別に気にするな。俺は勝手に出てきて、勝手に手伝って、勝手に出ていくだけだからな」

「・・・それはどうかと思うけどね」

「まあ俺はもう帰るけど、二人ともあんまり無理するなよ」

「ああすまないね」

「気にすんな。じゃな」

俺は炎を使ってゲートを作り

家に帰った。

(・・・アルフってスタイルいいよな・・・)

「マスター？何かおっしやいましたか？」

「い、いえ・・・何も」

「でしたらいいです」

今、デバイスから負のオーラを感じたよ・・・。

すれ違い（後書き）

アルフ「フェイト・・・」

無月「朝には目が覚めると思う。だが、あんまし無理なことはいえないが、

フェイトだって女の子だ。まあその辺のことはアルフが一番理解していると思うからあえて口にはしないぞ」

アルフ「本当にすまないね」

無月「別に良いよ言っているだろ。俺は勝手にやっているだけだ」

アルフ「・・・・・・・・あるがとう」

無月「・・・・・・・・それを言うならあ「り」がとうじゃね？」

アルフ「こんの~~~~~／／／」

アルフが首を締めてくる。

無月「（背中に柔らかいのが当たってるよ~~~~○）ＴへＴ○）くう）「

## Xの新技（前書き）

無月「よう」

作者「おう、ってお前久しぶりに見かけたなー」

無月「まあな。ちょっとばっかし修行を置いてな」

作者「修行？ってことは技でも手に入れたのか」

無月「それは本編のお楽しみ」

## Xの新技

フエイトside

陽が昇り、部屋が明るくなったところで私は目が覚めた。

「あれ？傷が無い・・・体が軽い」

私はトントンッとジャンプしてみた。

体に異常が見当たらない。昨日は無茶なことをしたから体が悲鳴を上げていると思ったのに、逆に今までより体が軽くなっている感じがする。

（一体どうして？）

そう思っていると・・・

「フエイト!!」

アルフが私に飛びついてきた。

「フエイトー！！無事だったかい？」

「う、うん。それよりアルフ。私の体の傷がなくなっているうえに、今までの疲れが全く感じないんだけどどうして？」

「うーん・・・それはあたいにも分からないんだよねえ・・・」

「どういうこと？」

私は昨日のジュエルシードの暴走を止めた後からの話を聞いた。

「また彼・・・ボンゴレ君に助けられたんだ・・・」

「そうだよ、フェイト。あいつが居なかったら危ない状態だったんだから」

「ごめんねアルフ。心配かけて」

「いや、私はいいよ。それより昨日の彼の治癒魔法はすごかったんだよー」

「へえ・・・どんなのだったの？」

「なんか・・・剣？みたいなのが出てきて、それをフェイトに突き刺して・・・」

「・・・え」

「まああたいもそのときは驚いたけど、あれで本当にフェイトが回復してるんだから本当に驚いたよ」

（彼にまた助けてもらったんだ・・・彼に恩返しができたらいいな・・・）

そんなことを胸に秘めたフェイトであった。

無月side

（暫くは修行に身を入れたいな）

そういうことで、無月はフェイト達と別れた後、

三日間の間学校をさび・・・ではなく休んでいた。

修行場所は林の中。結界を張ってグローブの戦い方のバリエーションの追加と、新技の実験をしていた。

（よし、新技は完成した。後は実践で使えるか・・・！！）

そのとき無月は感じた。ジュエルシードを・・・

ちょうど新技の実験台にはいいか

（それに、ヴァリアーリングも試しておきたいしな）

「なーんだ、もう封印は終わっているじゃねえか」

そう思ったが、なのはとフェイトの決闘に邪魔な奴がいた・・・

「あの変態・・・またフェイトの邪魔してやがるよ・・・  
まあ3（なのは・ユーノ・変態）対2（フェイト・アルフ）では  
差がねえ・・・行くぞ」

そこには赤いグローブを付け、腰に2丁の銃が装備されていた。

フェイトside

（くっ・・・母さんの鞭打ちが体に響いてる・・・  
反応が遅れた！）

変態の砲撃がフェイトを包み込む。

「ナッツ」

ドガアアアーン！！・・・

「フェイトー！！！」

（アルフが叫んでる・・・あれ？痛くない・・・

それに・・・温かい)

フェイトが目を開けると・・・

無月side

「ナッツ」

(カンビオ・フォルマ・マンテッロ・ディ・ボンゴレ・プリーモ)

ドガアアアーン!!・・・

(俺って・・・本当にギリギリで間に合うよな)

「フェイト大丈夫か？」

「・・・え？あ、あわわわわっ!!!!」

~~~~~今の無月とフェイトの立ち位置~~~~~

・無月とフェイトをマントで被っている。

・右手でマントの端、左手でフェイトを抱えている。

・体は密着状態。

~~~~~

「大丈夫か？」

「え、あ、はい・・・」

「フェイトは向こうの白い悪魔を頼んだ」

「うん」

そして俺は腰のホルターから「2丁拳銃」を手にとった。

「まずは、こいつで試させてもらっぞ変態。カッ消すぞ!!」

ズダンッズダンッ！！

そして、普通の銃からではありえない、オレンジ色の光線が銃口から放たれた。

秀哉 side

「お前・・・相当のバグキャラだな」

「SSSランクの魔力量の変態には言われたくないな」

（コイツ・・・俺の砲弾を的確に撃ち落としてきやがる）

「・・・やっぱり遠距離は少し苦手だな」

あいつはそう言うつと2丁銃ホルターに戻しやがった。

「やっぱり男は接近戦だよな」

「ッ！！」

またかよ、こいつ速過ぎるだろ！？

「お前には俺のグローブの新技をテストしてやる  
くらいえ、【Xバティック】」

あいつの各々の指先から炎のエネルギーが放たれた。

「くっ！！」

一撃の威力は弱いが、弾丸速度が速い。

「ふーん。Xバティックは使い続けると回避される

確率が上がるか。じゃあ次だ【Xクロー】」  
「今度はなんだよー!!」

次のは、あいつのグローブが炎でコーティングされて  
巨大な炎の爪になっていた。そして攻撃が見えなかった。

「ぐはっあああー！！！！」

無月side

【Xクロー】は炎を消費し続けるが、攻撃速度が格段にあがる。  
接近戦重視の肉体強化の効果も含んでいる。

（そろそろ終わらすか）

炎圧をあげて、変態の後ろへ回り込む

（【クローブレイズ】！！）

「ぐはっあああー！！！！」

そして変態は堕ちた・・・

「そろそろフェイト達も終わって・・・ん？」  
そこにはフェイトとなのはを止めている少年がいた。

「時空管理局執務管クロノ・ハラオウンだ。  
詳しい事情を聞かせてもらおうか（´・`・´）キリッ」

## Xの新技（後書き）

無月「……………」

作者「そうせフェイトが心配なんだろう？」

無月「まあな……俺は次回クロノを潰す！」

作者「まあそう言うことは分かりきっていたけどな……

てか、新技の説明とかしなくていいのか？」

無月「それはご都合主義ということだ」

作者「はいはい……」

時空管理局？何それ美味しいの？（前書き）

無月「前回の終わり頃に変な奴が現れたよな」

作者「ああ時空管理局のクロノとかいう奴のことか」

無月「ああ。あいつさ、何かしそうなんだよね」

作者「何かって？」

無月「さあ・・・何かって何かだよ！」

作者「・・・それって無茶苦茶だな（汗）」

時空管理局？何それ美味しいの？

無月side

（何者だあいつ・・・）

「時空管理局執務菅クロノ・ハラオウンだ。  
詳しい事情を聞かせてもらおうか（　・　・　・　）キリッ」

フェイトがジュエルシードを取ろうと手を伸ばすが、  
クロノの砲弾によって撃ち落とされてしまう。

「きゃっ！」

「フェイト！！」

（おいアルフ聞こえるか）

（その声はボンゴレ！？）

（話は後だジュエルシードと転移魔法を頼む）

（任せて！・・・ってあんたはどうするんだい？）

（ん？ちよつとね・・・フェイトを攻撃したあの坊やにおきゆうを・・・  
ね）

「大空のVG・大地のシモンリングよ・・・  
今、一つになりて、我に力を貸せ」

そして二つのリングが一つになった。

「クロノとか言ったよな・・・お前」

「ここでの戦闘はカードガア！」ぐはあ・・・」

「わりいな、どうやら手加減は出来そうにない・・・」

俺はクロノを重力で大地に押さえつけたまま

「・・・オペレーションX」イクス

「了解しました。ボス」

「イクスバーナー発射シークエンスを開始します」

「ライトバーナー柔の炎15万FVで固定」

「レフトバーナー柔から業に変換しつつ

炎エネルギーをグローブクリスタル内に充填」

「ターゲットロックライトバーナー炎圧再上昇」

「18万・19万・20万FV」ファイアンマボルテージ

「レフトバーナー炎圧上昇18万・19万・20万FV」

「ゲージシンメトリ発射スタンバイ」イクスバーナーピィーーーー

「XBURNER!!」

ゴアアアアーーーーー!!!!

クロノは業の炎に包まれた。

「ぐああああーーーーー」

「安心しろ非殺傷に設定してあるからな」

「行くぞアルフ！」

「おう！」

なのはside

私は凄いのをみた。

私とフェイトちゃんの攻撃を止めた男の子を

簡単に倒してしまう。一撃。

私のスターライトブレイカーと同等かそれ以上の攻撃。

私はその技を見て、彼に憧れてしまった。

「私にもんなな技が・・・」

使えたらいいのに。そう言いたかった。

でも、今の私にはあの技を超える術はないということ  
本能的に感じ取ってしまった。

「あっ・・・」

そんな事を考えているうちに、  
彼とフェイトちゃんたちは転移魔法でどこかへ  
行ってしまった。

アルフ side

「フェイト・・・」

フェイトはプレシアの酷い仕打ちに加え、  
クロノとかいう奴による攻撃。

「アルフ。フェイトを早く横にするんだ」

「ああ分かった」

「サイフォジオ！」

またこのあいだと同じ大きな剣が出てきたフェイトの  
傷が塞がっていく。

「・・・一応はこれで大丈夫だろう」

「すまないね、あたいが不甲斐ないばかりにあんたに

迷惑を「ストップ」ないだい？」

「何度も言わせるな。俺は好きにやっているだけだ  
アルフが気にすることでは無い」

「じゃあなんでアンタはこんな危険なことに  
首を突っ込んでいるんだい？」

「・・・さあな。ただ」

「ただ？」

彼は息を深く吸い込む。

「俺は人に利用されるのが嫌いだし、

人が人に利用される事も嫌いだからだ」

「！！お前、フェイトの何を知っている！？」

「プレシア・テストロツサの命令により、

危険を犯してまでジュエルシードを集める少女。

ただ・・・昔の母親に戻って欲しいがために・・・」

「アンタ・・・何者だい？そしてなにが目的だい」

彼の発言にアタイの警戒心が増す。

「何者かは、今のところ言えないな。目的・・・か」

「・・・」

「強いて言えば・・・フェイトに幸せになってほしい事・・・か  
な」

「フェイトの幸せを望む？」

「まあ。今のところこんなところは・・・な」

「そうかい」

私は彼の言ったことに嘘は無いと思う。

でも、最初の頃からこいつはフードを被っているけどなんでなんだ？

聞いてみるか。

「じゃあ、なんでアンタは最初の頃から顔を隠しているんだい？」

「ん、ああそれは時期に分かる時がくる」

「いや、隠してる理由を聞きたいんだけど・・・」

「だってさ、正体不明の見方ってかつこよくね（笑）」

「・・・聞いたアタイがバカだったよ」

取り敢えず、プレシアよりは信頼できると思った。

そして、アタイは彼に対する警戒心を解いた。

「しょうがないねえ。取り敢えずはアタイはアンタを信じてみるよ」

「ふっ。そうしてくれると俺もありがたい」

それにフェイトは彼のこと嫌いではないみたいだし。

あの秀哉とかいう変態よりは何百倍、何千倍もマシだ。

時空管理局？何それ美味しいの？（後書き）

無月「（一、二、三）フー・・・」

作者「良かったな。アルフの警戒心を解けて」

無月「ああ。それにクロノにもお級を据えることが出来たしな」

作者「・・・本当はそこだよ」

## フェイトの気持ち（前書き）

無月「んっっ」

作者「なんでそんなにハイテンションなんだ？」

無月「別に『クロノ』とかいう奴をボコれて嬉しいなんて

思っ  
てないよーっ」

作者「……（こいつまだそんなことを）」

## フェイトの気持ち

「ん・・・」

私は目が覚めたときにはいつものベットだった。

「私は・・・あつ」

昨日のジュエルシード封印のときに  
時空管理局とかいうところのからきた  
クロノとかいう人に攻撃されて・・・

「・・・あれ？どこも痛くない・・・」

どうしてだろう。どこも痛くない。

「目が覚めたのかい？」

いつの間にかアルフだ傍にいた。

「私が昨日気を失ってから何があったの？」

「えっと・・・フェイトを攻撃したクロノとかいう奴が、

ボンゴレの滅茶苦茶な攻撃によって倒されて、その後

転移魔法でここに戻ってきて、そのままボンゴレが治癒魔法で

フェイトの怪我を治してくれたんだよ」

「そっか・・・」

またあの人が私を助けてくれたんだ。  
なんでだろう・・・

（なんか胸の当たりがあつたかい感じがする・・・）

それはフェイトにとって初めての感覚だった。

「どうしたんだい？フェイト」

「ひゃっ！え、い、いや、なんでもないよ！／＼／」

「フェイト。顔赤いよ」

「にやんでもないよ！」

・・・噛んじゃったよ・・・／／／

無月side

昨日の戦いでおそくなのはとユーノと変態は  
時空管理局側についたはずだ。

それに、そろそろフェイトが海にある六つのジュエルシードを  
封印するために巨大な魔法を打ち込むはずだ。

「ってことは・・・今日がプレシアによる攻撃があるのか」

「無月どうしますか？」

「どうって・・・簡単なことだろアルフィン」

「俺がフェイトの変わりになって雷撃を海に打ち込んで、

その後プレシアの目を覚まさせるまでだ！」

「さすがですね。マスター」

「何がさすがは知らんが、俺のことはマスターで決まったのか？」

「はい。これが一番しつくりきますので」

「・・・」

まあダーリンやご主人様よりは遥かにマシだな。

「よし、行くか」

「Yes・My road」

「・・・普通に返せよ」

（一応プレシアの雷撃に備えてのシールドを考えておくか）

俺は全てのVGと全てのシモンリングを装備した。

フエイトside

私は海にあるジュエルシードを封印するために  
海に剛雷を落として、ジュエルシードを強制発動させて  
位置を特定しようとしていた

「アルタス・クルタス・エイヒヒス

煌めきたる電神よ、今導きの元降り来れ

バルエル・ザルエル・プラウゼル

撃つは雷、響くは剛雷

アルタス・クルタス・エイハ「お前にはまだ早い」えっ」

私は腕を掴まれていた。振り向くとそこに居たのは  
彼だった。暫くの間、私の前に現れ無かった・・・

「今のお前の魔力量じゃジュエルシードの強制発動後の  
封印までは辿り付けない」

「ボン・・・ゴ・・・レ」

「だからお前は後ろに下がって見ときな」

彼はそう言い、私の頭を軽く撫でてくれた。

「ふえっ！・・・・・・・・・・／／／」

「さあ、行け」

「あ、ありがとう・・・・・・・・・・／／／」

いつの間にか私を助けてくれた。いつの間にか私の傷を治してくれた。

彼の素顔は分からない。それでも私は、彼のことを・・・・・・・・

「そんじゃあいくか！」

彼はそう言い、呪文を唱え始めた・・・

無月side

俺は少しだけ何の技をするか、迷っていたがすぐに決まった。

「そんじゃあいくか！」

気持ちを落ち着かせる。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル

ト・シユンボライオン・ディアコネートー・モイ

（契約に従い我に従え）

バシレク・ウーラニオーノーン

（高殿の王）

エピゲーター・テートー・アイタルース・ケラウネ・ホス

（来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ）

ティーターナス・フティレイン

（雷霆）

ヘカトントキス・カイ・キーリアキス・アストラプサトー

（百重千重と重なりて走れよ稲妻）

【キールプル・アストラペー】！！

【千の雷】！！」

ズガアアアアアアーーーーー！！！！

詠唱が終わり、大いなる雷が海へと放たれた。

そして、ジュエルシードが強制発動された。

「さて、フェイトはなのはと強力してあの六つのジュエルシードの封印をしてこい。多かれ少なかれ、なのはもそのつもりだから」

そして俺はさつきから俺を遠くから睨んでいる変態をボコッ・・・ではなく。OHANASIをしようとしていたが・・・

「あ、あの！！」

フェイトに呼び止められた。

（俺ってなんか悪いことしたっけ？）

そんな事を考えていると

「も、もう一度・・・頭を・・・..  
な、な、な、撫でてくれましゅか？」

（・・・涙目＋頬を赤くして＋上目遣いでそんなこと  
言っんじゃないよ！スゲー破壊力だろうが！！）

と、内心叫びつつ、

「ああ、いいよ」

と言って、フェイトの近くに行き・

ナデナデ

「……………あ、ありがとう／＼／＼」

真っ赤な顔をしたフェイトにそう言われた。

「じゃあフェイトも頑張れよ」

「マスターの女落とし」

アルフィンが何か言ったが、無視し、変態のところに向かった。  
手を離れたとき、フェイトの顔が少し残念そうに見えたが、  
気のせいだろう。

（さて、ここは海だから本当は雨のVGで戦いんだが、  
あれは闇の書事件の際に使用する予定だから使えない。  
となると、やはり大空と雲のVGと大地のシモンリングがメイン  
だな）

さて、変態をどうやって甚振ろうかな……

「マスター怖いですよ」

アルフィンに突っ込まれたが、あえて返さないようにしよう。

## フェイトの気持ち（後書き）

無月「……………」

作者「どうした無月。考え事か？」

無月「んー。なんかフェイトの顔赤かったけど

風邪でも引いたのかなって思ってたさ」

作者「…………（何言ってるんだコイツ）」

## 無月散る（前書き）

無月「しっかしさー変態の相手するの面倒なんだけど」

作者「仕方ないだろ。時々は出さないと読者が  
忘れてしまうかもしれないだろ？」

無月「・・・え？」

## 無月散る

無月side

俺の目の前には変態が居る。

「よう、また会ったな。ゴミムシ風情が」

「久々だな、変態。牢屋にでも入っていたのか？」

「ふっ。。。テメエを墮とすために、アースラの訓練所で修行を積んでいたんだよ」

「なのはやフェイト達を落とすの間違いじゃねえのか？」

「。。。。。。」

（凶星かよ。。。）

「まあいいさ、お前はここで散る」

「へっ。。。試して見るよおおおー！！」

そして、変態とボンゴレの戦いが始まった。

「シュート」

「くっ！」

変態が13個の魔力弾を精製して、それぞれをコントロールしながら俺に向かって撃ってきやがる。

「甘い！」

「お前がな！！」

「っ！！」

俺が回避したその先には、収束魔砲を溜め終わった変態がそこにいた。

「これで、消えな。エレクトバスターー!!」

「うあああー……」

(俺が……敗北……?)

秀哉 side

ついに……ついに……ついにあの忌まわしいボンゴレを  
堕とすことが出来たぞ!

「くくく……ははは……はっはっはっはー!!!!」

これで……これで……

「なのはやフェイト達のようなボンツキュッボンの  
美少女達が俺の物になるぜー!!!!  
ヒヤッホー……イ!!」

これで10年後にはあんなことやこんなことを……

「ん、終わったのか?」

「え?」

俺がとあることを妄想していたが、  
目の前には俺が堕としたはずの奴がいた。

「お、おお前は俺が堕としたはず!  
な……なんでここにいる!?!」

「ふっ……いいぜ。種明かしといこうか」

ボンゴレはそおい、耳にあるイヤリングを見せた。

無月side

「お前が倒したと思っていたものは、幻覚。

つまり、まやかしたよ」

「そんなバカな！確かに当てた感覚はあるんだぞ！？」

「はぁー・・・原に俺はここにいるし、それだけ

俺の幻覚が強いつてことだろ？」

「そんな・・・そんなことが・・・」

そう。俺はここに来る途中から霧のVGと使い、

俺の分身、正確に言えば幻影を作ってたんだ。

さらにはそれを砂漠のシモンリングの力でコーティング。

普通では誰も気づくことが出来ない、強力な分身を作り上げていた。そしてそれを変態と戦わせていた。

「さて・・・お遊びはここまでだ。こっちだって予定が詰まってるんでな」

俺は大空のVG・大地・氷河のシモンリングに

炎を灯した。

「さっさと終わらせる」

俺は変態の後ろに回り込み、後頭部に強い衝撃を与え、

変態が怯んでいる間に、大地の重力で、海の水面のギリギリまで

落とす。その後、氷河の力で「ダイヤモンドキャッスル」

無敵の防御壁を

変態を中心に生成して、変態を氷の城に閉じ込めた。

「なんだ……これは」

「それは潔癖と鉄壁の完全なる氷の城だ」

「氷の城？」

「そう。そして、それを破壊するのはのはの全力全壊の収束魔砲以上の力がある」

「なん……だと……」

「お前は暫くそこにいな」

「まずい、もう無効は六つのジュエルシードの封印が終わっている  
じゃねえか!!  
くる………プレシアの雷が!!

フエイトside

「友達になりたいんだ」

なのはは、私にそう言った。  
そんなとき……

ゴオオオオオオオーーーーー!!

「母さん」

雷が私に向かって降り注いだ。

「リマ・チャージル・セシルドン！」  
「え？」

雷は私に当たらなかった。  
それは……

「ボンゴレ君」

「高町！ フェイトみたいに俺の後ろに來い！」

「ふえ！ うん。分かった」

彼の腕のいろんなところに亀裂が入り、  
地が出ている。

「ボンゴレ君！！」

そして、雷が止まった。

「くっ！ やはりこの技は体に負担があるな」

「ボンゴレ君。その腕……」

「なに心配しているんだよフェイト。今までのお前の傷の方が  
深刻だっつーの」

彼はそおいい、私の頭を撫でてくれた。

「まあいい、高町、いずれフェイトとは話をさせてやるから  
今日のところは簡便な。フェイトもな」

「は、はい。分かりました」

「うん……／＼」

「アルフジュエルシードを3つ取ってきてくれ」

「ああ、分かった」

「開け」

そして私たち3人は帰った。

無月side

「くっ」

はやり、あの巨大な盾を2つも操るのにかなり体に負担がかかるな。

「ボンゴレ君。その腕・・・早く手当しないと!!」

「ん、いや、いいよ。自分の治癒魔法があるし」

「そうだよフェイト。こいつの治癒魔法をみときなつて」

俺は両手を掲げ・・・

「サイフォジオ。シン・サイフォジオ」

俺は自分とフェイト達も回復させた。

「えっ何で私たちまで回復させたの？」

「何でつて・・・母さんのところにジュエルシードを届けに行くんだろ？」

「!!!う・・・うん」

「じゃあな!」

俺はそおいい他の場所に転移した。

ナレーターside

そして次の日

無月side

昨日のあの後、フェイトとアルフは離れ離れになって、アルフに至っては、アリサの家に世話になっている頃だな。そして明日の朝・・・フェイトとなのはの勝負が始まる。

「あ、そういえば・・・変態のダイヤモンドキャッスル  
解除していないよな・・・」

「マスター・・・貴方は鬼ですか」

「・・・まあいつか！（笑）」

「・・・（このマスターは鬼ですね）」

「助けるやゴリアアアーーーー」と言う叫び声が聞こえたような気がした

無月とアルフィンであった。

無月散る（後書き）

無月「ふー……。楽しかったなー。」

作者「何がだ？」

無月「いやー。俺の幻覚であいつが高笑いしているところとか、その後とかさ」

作者「……お前性格良いな」

## フェイトVSなのは、海の上の決闘（前書き）

無月「あのさー」

作者「んあ？」

無月「タイトルだけ、無駄にかっこよくね？」

作者「だってさ・・・かっこいいじゃん」

無月「・・・だと思ったよ」

## フェイトVSなのはは海の上の決闘

なのはside

「ただ、捨てれば良いってわけじゃないよね。逃げれば良いってわけじゃ」

もつと無い。きっかけはきっとジュエルシード。だからかけよう、お互いが持つてる全部のジュエルシードを！」

ジュエルシードが私の周りに浮かぶ・・・

「それからだよ全部・・・それから・・・」

私たちの全ては、まだ始まってもない。

「だから本当の自分を始めるために」

だから始めよう。最初で最後の本気の勝負！！

無月side

「おーやってるねえー」

「き、君は！」

「ボンゴレ！」

フェイトとなのはは海の上の上空で戦っていた。

「おーっす。アルフとフェレット状態で温泉に入って女性の体を眺めていた

ユーノさん」

「え！なんでそのことを！？」  
「う、うわぁー・・・」

アルフがユーノの対して冷ややかな目線を送っている。

「これが私の全力全開！スターライトブレイカーーーーー！！！！」

ドガアアアアアアアーーーーー・・・

「うわぁなんつうバカ魔力・・・その上バリエーションで・・・  
ただの収束魔砲の強化版だろうが」

「あははは（；・・）」

「てか、フェイト生きているのか？」

「・・・（；・・）」

「・・・」

「・・・（´Д｀；）ノ」

「・・・」

「・・・；（´ω｀）∴」

「あ、フェイトが落ちてるよ」

「んじゃ、助けてくるわ」

フェイトside

負けた。最初の頃は魔力だけが大きかったただけなのに。  
今じゃ私よりも強くなって・・・  
でも、悪い感じはしない・・・

「よつと・・・」

誰かに抱えられてる・・・

「ん・・・」

目を開けると・・・

「大丈夫みたいだなフェイト」

「ボンゴレ・・・」

彼がいた。しかもこの状態は・・・

「・・・お姫様抱っこ／＼／＼」

「！来る！！なのは、フェイトを頼む！」

「え！うん」

彼は何かを急いでいた。

「そろそろ来るか・・・リマ・チャージル・セシルドン！」

彼はあの時と同じように巨大な盾を二つ出した。

「ボンゴレ君！その技を使っちゃダメ！！

あなたの体が！！」

そのとき、母さんの雷が降り注いできた。

「ハアアアーーーー！！」

「アースラのエイミィ！居場所の解析を！！」

エイミィ？誰だろう？

あ、母さんの雷が止んでいく・・・

「取り敢えずみんな。アースラに戻ってくれ」

「……えっ?」

「これから、大事な戦いが待っている。エイミィ転送を」

そして私・なのは・アルフ・ユーノの4人は  
アースラへと転送された。

無月side

「さて、俺たちも行くか」

「そうですねマスター」

そして俺たちも炎のゲートをくぐった。

リンデイスide

あのボンゴレとかいう子、アースラに炎の出すや、  
いきなり炎の中から出てきた。

「ここは仮りにも管理局。どうしてそんなところに転移が出来るのかしら?」

一体なものなのかしらこの子は・・・

「?別に。この程度誰にも出来るだろ」

普通はできませんよ。

「それに、今は俺のことより、目の前のことに集中しな」

彼の言葉通りだ。そして私はモニターに目を向け……!!

「危ない！防いで！！」

プレシアの雷撃が局員達を襲う

無月side

「いけない、局員達の送還を！」

「りよ、了解です！」

「もうダメね時間が無いわ。たった9個のロストログアではアルハザードにたどり着けるかどうかは分からないけど……でももういいわ、終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間をこの子の身代わりの人形を娘扱いするのを……」

フェイトの体が強ばる……

俺はフェイトの隣に立って、フェイトの手を握る……

「ボンゴ……レ」

「聞いていて……あなたのことよフェイト」

フェイトの力が無くなっていくのを感じる。

俺は握りしめる力を強めた。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのに、

そっくりなのは見た目だけ、役立たずでちっとも使えない

私のお人形」

「最初の事故の時にねプレシアは自分の娘、

アリシア・テストロツサを無くしているの。

彼女が最後に行なっていた最後の研究は使い魔とは

異なる、使い魔を超える人造生命の生成そして、

死者蘇生の秘術。フェイトって名前は、当時彼女の研究につけられた

開発コードなの」

エイミーが説明するが、今のフェイトにはどうでも良いことだろう。今のフェイトには自分が本当のプレシアの娘ではなく、作りものでしかないということだろう・・・

「よく調べたわね。そうよ、その通り。だけどダメね。

ちっともうまく行かなかった。作り物の命は所詮作り物。

失ったものの代わりにはならない。アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままを言ったけど、

私の言うことをとてもよく聞いてくれたわ」

「やめて・・・」

なのはも、みんなも辛そうだ、だけど・・・

「・・・良いことを教えてあげるわフェイト。

あなたを作り出してからずっとね、私はあなたが大嫌いだったのよ」

「おっと」

フェイトが崩れ落ちるが

俺が支える。

「私たちは旅立つの。忘れられた都・・・アルハザードへ!!」

「・・・話は終わったか？プレシア」

「ん？」

「お前に良いことを教えてやるよ。」

「良いこと？」

「アルハザードにも死者蘇生の技術なんかねえんだよ」

「！！お前何を知っていい」全部だよ」はあ？」

「お前がフェイトに鞭打ちをしていたことも・・・

フェイトの心遣いを踏み躪ったことも、

アルフやフェイトがお前にされたことも全部知ってる」

「お前！何者だ！！」

「そんなことは関係ねえだろ。」

それに、お前はフェイトの母親だろうが・・・

母親なら、ちゃんと娘のことを見る！

亡くなった人の事ばかりを追いかけて、

今あることから目を反らすんじゃないやねえよ！

フェイトが人形？かりそめの器？そんなことだって

関係ねえんだよ！フェイトはフェイトだろ、例え人形だとしても

お前がこの世に生み出した紛れもねえお前の娘だろうがああ！！」

「それがd「それがどうしたと言っくんじゃねえよな」くっ・・・」

「フェイトはな・・・傷つきながらも、お前に笑ってほしくて、

痛い思いも我慢して、甘えたいことも、友達を作ることにも我慢し

て、

耐えて耐えて耐えて耐えて、お前のためにジュエルシードを

集め続けていたんだよ！」

「ボンゴレ・・・」

「ふっ・・・それでも私はアリシアともアルハザードへ」

「行っても無駄だぜ、アルハザードに死者蘇生は存在しない」

「そんな馬鹿な！アルハザードには」

「ああ、アルハザードには凄い技術が沢山あるさ」

「それならなぜ！？」

「あっても不老が限界だ。亡くなった命はどうすることも

「できやしないんだよ。」

そして、通信が途切れる。

「ボンゴレお前は何を知っている！」

うわぁクロノが絡んで来たよ・・・

よし、無視だ！

「なのはフェイトのことを頼む」

「う・・・うん」

「フェイトお前に言っておくことがある」

俺はフェイトの目を見た・・・

「俺がお前に会おう前からお前の事を知っていたよ。

それでも俺はお前の事を軽視したりしたか？

フェイトはフェイトだ。お前はここに存在して、

今を生きている。それだけだ。後はお前自身が自分で考えて

自分の気持ち通りに行動しな」

そして俺はフェイトの頭を優しく撫でる。

「んーじゃまあ行きますか」

俺は炎に包まれた。行き先はもちろん・・・

（プレシアの所に行くぞー！）

## フェイトVSなのはー海の上の決闘（後書き）

無月「さすが白き魔王だな」

作者「デИБインド状態で、あのバカ魔力の砲撃は・・・な」

無月「言うな。寒気がする」

作者「お前もなのか・・・見た目は可愛いのかな」

無月「・・・」

ラブコメやめれ by ボンゴレ（前書き）

無月「なんかなー」

作者「なんだよ。また何かあんのか？」

無月「いやー、何か全力で戦いたいなーって」

作者「お前が全力で戦うと、中規模次元震が軽く起きるぞ」

無月「・・・自重します」

ラブコメやめれ by ボンゴレ

アースラ（内）side

「ボンゴレ君！！」

なのはがモニターを見たがら叫んでいた。  
そこに居たのは、さっきまでそこに居たボンゴレだった。

「どうやってそこに！？それより、

さすがの彼でもあの量の敵の数には勝てない！」

「！！敵の数がどんどん減っていきます！」

「何！」

全員がモニターを見る。

そこには沢山の氷の人形がロボットと戦っていた。

「な、何なんだあれは！？」

《おや？ようやく気づいたみたいだな》

「ボンゴレ！そいつらはなんだ！！」

グルッポ・アタック・インヴェンチャービル

《こいつらは無敵の攻撃隊だ》

「無敵の攻撃隊？」

《こいつら一体一体が俺の素の戦闘能力を持っている。今召喚している数は30だ

まあ最大は800体だな》

「君はバグキヤラだな」

《そりやどうも。おや、こちらにも結構来たな・・・

雲・大空のVG、森・大地のSR起動。》

なのはside

(す・・・凄い。)

何十、何百ものロボットがボンゴレ君に襲いかかっているのに  
いとも簡単に倒していく。

「こ・・・これは」

リンディさんの顔もみんなの顔も驚きで引きつっている。

近くにいるロボはトンファーで、遠くにいるロボは何かで地面に押  
さえつけて

何かで切り裂いて撃破している。

「すみません。これが本当に魔法ランクDの人がやることなんでし  
ょうか？」

「え・・・ええ。確かに魔力判定では、Dです」

エイミイさんがそう言っているけど、本人もかなり驚いている。

「私達も・・・私達も行きます！」

「・・・分かりました。貴方たちも行ってください」

「・・・私も、私も行きます！」

「フェイトちゃん!？」

フェイトちゃんが自らの意思でプレシアさんのところに  
乗り込もうとしている。

「本当に行くの?」

「はい」

「そう。では行ってらっしゃい」

そして、私たち（なのは・フェイト・ユーノ君・アルフ・クロノ君）は  
プレシアのいるところへと向かった。

無月side

「だっ~~~~もうメンデエ——！！」

「マスター頭いかれましたか？」

「アルフィン……今後一切人間化するのを禁止する」

「ええー……って、一度も許可してくれないではないですかマスター  
——！！」

「はいはい……」

さて、九道路に向かうか、最下層に向かうか悩むなあ

「マスター。誰か来ましたよ」

「ん？」

クロノかこいつは確か最下層に向かっていたよな……

「ハアハア。ようやく追いついた……」

「ようクロノ。お前どうせ最下層に向かうんだろ？」

「だったらどうした？」

「俺も手伝ってやるよ」

「そうか、不意だが、お前の実力は身の染みているからな」

「え？あの時の技、本来の1割も火力出していないけど」

「……」

「まあいいや、さっさといこうぜ」

「あ、ああ（こいつとは戦いたくないな）」

そして俺とクロノは最下層へ向かった。

なのはside

私はフェイトちゃん達と別れ、

九道路の奥で封印を施そうとしていた。

「防御は僕がやる。なのはは封印に集中して」

「うん。いつも通りだよ。ユーノ君いつも私と一緒にいてくれて、守ってくれたよね。だから戦えるんだよ。背中がいつもあったかいから！」

「デバインシューターフルパワーー！」

そして、振るうー！

「シューーートー！！」

無月side

実は俺、最下層には行かなかった。理由は、なのはとユーノのラブコメを眺めたかったからだ！

あのとき、クロノになんかいろいろ言われた気がするが、きっちりなのはとユーノのラブコメを見ることが出来た。

さて、封印も終わったし、そろそろ呼びかけるか・・

「おいそこのカップルさん」

「えっ。ボンゴレ君！？」

「君はクロノ君と一緒に最下層へ向かったんじゃない」

「いやー、なのはとユーノのラブラブっぷりを見たかったから  
引き返してきたんだ」

「「ら、ラブラブ!? / / /」

「何二人して動揺してるんだよ。やれやれ」(´ー、´)」

「ど、動揺なんてしてにやいもん!」

「なのは・・噛んでるよ・・」

「ごめん。ユーノ君」

「はいはいイチャイチャは帰ってからにしてください。

それにお互いに好き同士ならキスでも二人で熱い夜でも  
過ごせばいいのに」

「ぼ、ボンゴレ君! いきにやにを言ってるのくくく!! / / /」

「そ、そうだよ、こんな時に不謹慎だ! / / /」

「・・・さっきまでイチャイチャしていた奴らが言えた口かよ」

「マスターそろそろです」

「ああすまん、アルフィン」

「「アルフィン?」」

「ん? ああアルフィンは俺のユニゾンデバイスなんだ」

「ユニゾンデバイスだって! ?」

「ユーノ君、何なのそのユニゾンデバイスって?」

「ユニゾンデバイスっていうのh「おいそろそろ行くぞー」後で  
話すよ」

「そんじゃ、炎を使うか・・・」

「開け」

ボワッ

「ここからフェイト達がいる最下層に行けるぞ」  
「え・・・」

「いくぞー」

「「お、おおー」」

そして3人は炎の中に入り、炎に包まれた。

ラブコメやめれ by ボンゴレ（後書き）

無月「そっだよ!!」

作者「どうしたんだ？」

無月「氷河のSRで無敵の攻撃隊を召喚して、

そいつらと戦えば良い修行になるんじゃないのか!!」

作者「……その手があったか!!」

これはフェイトのフラグか？（前書き）

無月「……………」

作者「どうした」

無月「ちよつと……な。フェイトとプレシアの

仲が良くなったのか心配だな」

作者「そっか」

これはフェイトのフラグか？

無月side

やばいな。地面の崩れが激しい。

「！不味い！！」

目の前には、地面が崩れ、落ちそうになっている  
アリシアとプレシアを支えているフェイトがいた。

「ちっ！間に合え！！」

俺は大空のVGで光速移動をし、プレシアの手とアリシアのポットの  
一部を掴んだ。

「ボンゴレ君！！」

「ふっ。プレシア。フェイトとの仲は治ったのか？」

「ああ。これからはフェイトとちゃんと向き合うよ・・・でも、

もう無理みたいね。フェイト、ボンゴレ。手を離して逃げなさい」

「い、いや、嫌だよ・・・お母さん！！」

「・・・だつてさ！！」

俺はプレシアを一気に引き上げ、虚数空間へ落ちて行くところするア  
リシアのポットの一部を掴み思いつき、フェイトとプレシアに向  
けて放り投げた。

そして俺は・・・

「ボンゴレ君！？」

「フェイト。せっかく母親との仲が治ったんだ。これからの

人生を楽しめ！！その前にアリシア！お前は不治の病をなんとか治せ！！！」

「ボンゴレ君！！」

「フェイト。俺は大丈夫だ、心配するな」

そして俺は虚数空間へ落ちていった……

「ボンゴレーーーー！！！」

フェイトの叫び声が聞こえた……。

（そおいえば俺、フェイトとプレシアの仲直りの際  
立ち会えなかったな……残念）

アースラ（内）side

「無事に全員の転送が終わりました！」

「ボンゴレ……ボンゴレが……」

「フェイトちゃん、ボンゴレ君がどうしたの？」

帰ってきたときにはフェイトは泣いていた。

「ボンゴレ君が……母さんとアリシアを助けるために……  
虚数空間へ……落ちた」

そのとき、この場に静寂が訪れた。

「て、庭園崩壊終了……」

フェイトもアルフも泣いていた。

「ボンゴレ・・・」

フェイトは泣き崩れていた。

「フェイト・・ごめんなさい。私のせいであなたの大切な人を死なせてs「勝手に殺すな」えっ!!」

そこには虚数空間に落ちたはずのボンゴレが居た。

無月side

「なっ・・・君は一体どうやって虚数空間から！」

「ん？あれは魔法を無効化にする空間だろ？」

俺のやつは魔法じゃなくて炎。魔力じゃなくて精神力・気力を使うからな。もしかしたら俺だったら大丈夫なんじゃね？と思  
って

落ちて行っただけで、まさか本当に大丈夫だったとはな。  
ぶっつけ本番で確証が無かったから内心ヒヤヒヤだったぜ」

と、俺は笑いながら話す。

「・・・」

フェイトが俺の目の前に着た・・・

パァァン！！

俺は頬を叩かれた。

「いたたた・・・どうしたんだよフェイト」

「何やっているのよ・・・あなたが居なくなったら

悲しむ人が居るでしょ！帰れなかったらどうするの！！」

フェイトは涙を流していた。

「・・・おいユーノ！俺って何かやばいことしたのか？」

「えーいきなり僕に念話で聞かないでよ！！」

「この役立たずなのはLoveのフレットが！！」

「え、ちよっ」

俺はユーノとの念話を切った。

「え・・・えつと・・・なんで怒っているのかな？」

フェイトさん（；・・）「」

俺は内心訳がわからずドキドキしていたが・・・

ギュッ

フェイトに飛びつかれ抱きしめられた。

フェイトは俺の胸で泣いていた。

「バカ・・・心配・・・かけないでよ・・・」

「ご・・・ごめん？」

俺は取り敢えずフェイトの頭を撫でた。

「あ、そういえば」

俺は高速移動でフェイトから離れ、プレシアの所へ行った。

みんなが驚き、フェイトが少し頬っぺを膨らましていた。

「さっきは助けてくれてありがとう」

「別に礼には及びません。あのぐらい誰にでも出来ることですから」

「「「「「普通は出来ません！」「」「」「」

「ははっ・・・それで私に何かな？

フェイトが物凄く睨んでいるんだけど・・・」

「いえ、プレシアさんの病気を治そうかと思ひまして」

「！！これは不治の病だぞ！治せるのか！？どうやって」

「ええ、俺なら治せますよ」

どうやってって言われても俺の【答えを出す者】（アンサートーカ  
ー）の

能力でそう答えが出ているからな。

「ど、どうやってだ？」

「まあ見てな」

俺はそう言い、両目を閉じた・・・

（【直視の魔眼】・・・発動。プレシアの病気を消す為、病気の歪  
みを見る）

「そこだ！」

俺はそう言い、ナイフでプレシアの病気の死点を断った。

「がはっ」

「ボンゴレ！！」

「サイフォジオ！」

俺は即座にサイフォジオでプレシアを回復させる。

「貴様、何をしたのか分かっているのか!!」

3下が何か言っているけど、無視

「どうだプレシア。前までしていた病気による症状がないだろ？」

みんな首をかしげていたが・・・

「!!本当だ・・・体が軽い!深く息を吸い込める!!」

「「「「「えっ!?!」」」」」

みんな俺が何をしたのか分かっていないみたいだからな  
説明してやるか・・・

「俺がプレシアにしたことは、直視の魔眼で病気の死点を見て、  
ナイフでそこを攻撃して病気の元を破壊。

そのまま治癒魔法で傷口を塞いだっていうことだよ」

「そんなことが・・・できるわけ」

「出来る訳無いなんて言うなよ。実際目の前にいる  
プレシアの体は治ったんだからな」

さて、そろそろかな・・・

「それじゃあ俺はこの場から消えるでしょう・・・」

俺の体が燃え始める・・・

「まあフェイトとプレシアの処遇は

クロノが何とかしてくれるから安心しとけよ」

「勝手に決めるな！」

「待つて。君の素顔と名前を」

「それは今はまだ教えられないな・・・

そういえば艦長に忠告したいことが1つだけ」

俺は艦長<sup>リンディ</sup>の目を見つめる。

「これから、暫く経つと、4人の守護者が現れます」

「4人の守護者？」

「はい。その4人は闇の書の守護者で、魔力を集めるために活動を開始します。」

リンディの顔が強ばるのが分かる。

「それらの対応はそちらにお任せします。それでは」

そして、俺は・・・消えた・・・

これはフェイトのフラグか？（後書き）

無月「そういえば、前に神様を呼び出して、能力を追加してもらった時の

やつが、【直視の魔眼】・【答えを出す者】だったな」

作者「でもさ、お前のデフォの【マンガやアニメの能力を全て使用可能】って

いう能力があるんだから、追加で頼まなくても良かったのにな」

無月「……………いいんだよ!!」

作者「（うわぁ……キレたよ）」

## 暫しの別れ（前書き）

無月「本当にこれで良かったのかな」

作者「すまないな、死者蘇生の魔法を俺が知らないばかりに・・・」

無月「・・・・・・・・」

作者「・・・・・・・・（ニヤリ）」

## 暫しの別れ

無月side

俺がアースラから離れて数日が経過した。  
なのはも俺も久しぶりの学校への登校で、  
周りから少し、二人の関係を疑われたが、  
俺がきつぱりとそれを否定したためその容疑は綺麗に消えた。  
その際、なのはが少し残念そうな顔をしていたけど、  
ユーノがなんとかしてくれるだろうと言うことで無視した。  
そして今日は、フェイトとなのはが会う日・・・

「マスターは会いにいかないのですか？」

「うーん・・・少しばかり驚かすか」

チャリ・・・

俺はイヤリングに触れた。

なのはside

フェイトちゃんやプレシアさんのは裁判や事情聴取で  
数ヶ月から半年は離れ離れになるらしい。  
そして、今日はフェイトちゃんに会える。

「名前を呼んで。まずはそれからだよ」

「うん。ありがとう・・・なのは」

私とフェイトちゃんは泣きながら

抱き合った・・・

「うっうっ・・・感動だな」

「えっ!？」

そこには猫がいた。

「そっか・・・フェイトとプレシアとは暫くの間お別れだな」

「猫がしゃべった!？」

そう、私たちの近くにいた猫がしゃべったの!!

「よく見ておくがよい!」

猫の辺に霧ができる。そして、そこに立っていたのは・・・

「ボンゴレ君!？」

さっきまで猫の姿だったのに、彼（ボンゴレ君）が居た。どう見てもフェイトちゃんとはボンゴレ君のことが好きみたいだ。

「見送りついでに立ち寄ってみたんだ。あ、すぐ帰るから」

その時、・・・

「そろそろじかn・・・ボ、ボンゴレ!？」

クロノ君・・・空気読もうよ・・・

「つと・・・それじゃ俺は行く」待つてつ「えっ・・・!!!!!!」  
「「「「!!!!!!」」」」

フェイトちゃんはボンゴレ君に抱きついてた。  
そして・・・

キスをした。

なんであの状態でも顔がみえないのか不思議なの

無月side

俺はビックリして対応できなかった。

なぜならフェイトが飛びついてきて、キスをしてきたからである。  
まだ、キスは良かった。その後が問題だった・・・

チュパ、ピチャ、

ピチャ……

フェイトが舌を入れてきた。

「プハッ／／／」

フェイトの顔は真っ赤だった。

「助けてくれた御礼だよ。有難うね／／／」

フェイトの行動に、この場所に集まっていた5人は全員顔を真っ赤にしていた。

なのは「フェ、フェイトちゃん！何やってるの！！／／／」  
アルフ「フェイト・何時の間にあんなに大胆な子に／／／」  
ユーノ「フェ、フェイトはまだ、小学3年生だよ！！／／／」  
クロノ「こら、君たち！ふ、不謹慎だぞ！！／／／」  
フェイト「ふふっ／／／・またね」

そしてフェイトはまた俺にキスをしてきた。

「こほん！そろそろ時間だ」

おや、顔を赤くしたクロノが仕切り始めた。

「大丈夫さ。クロノにはエイミイがいるじゃないか」

「僕とエイミイはそんな関係なんかじゃ」

「なのははユーノだから諦めなよー」

俺は念話を切る。クロノが俺を睨んでいた。

「フェイトちゃん！思い出に出来る物こんなのしかないけど・・・」  
「じゃあ私も・・・」

なのはがピンク、フェイトが黒のリボンを各々交換した。  
そんじゃ俺も何か渡すか・・・俺は「普通」のトパーズの指輪を  
取り出した。

「ほらよ、フェイト俺からもだ」

「え、でも私からは・・・」

「いらねえよ。それにキスを貰ったしな」

「もー／／／」

「じゃあな」

「うん！／／／」

フェイトはみんなに見える位置に立って、

「「左手の薬指」」に指輪をはめた。

「「「フェイト（ちゃん）！！」「」「」」

何か、みんな指輪をはめただけなのに  
なにか驚いているな・・・。

そして、フェイトとアルフは旅立った。

さて、俺もそろそろ行くか。

そして俺は炎を纏った・・・。

なのはside

ビックリしたなー。まさかフェイトちゃんがあんな  
大胆な行動に出るなんて思わなかったの。

私もいつかは無月君と・・・ううん（ブンブン）  
そ、そんな。私と無月君はあくまで友達・・・  
そういえば、友達って思っているの私だけなのかな？

「そういえばボンゴレさ・・・ん？」

そこには彼はいなかった。

（あれ？何時の間に・・・まあいつか）

そして、なのはとユーノは家に帰っていった・・・。

無月side

「ふうー・・・」

今は普段の格好で家でくつろぎながら、  
今後の活動について考えていた。

「それにしてもさすが外国の子だなー

お礼でキスをされるなんて思わなかったぜ」

「マスターは本気でそんなことを思っているのですか？」

「本気？ああ本気だぜ。ってなにが本気なんだ？」

「・・・もういいです！フンツ」

「？おいアルフィーン・・・」

何か知らないけどアルフィンが怒っている。

（俺って何か悪いことしたのか？）

乙女心が分からない無月であった。

「私のご機嫌が取りたければ、

私の人間化と今夜の添い寝の許可をください！」

「いや、それは無理」

「マスターのバカーーーーーッ！！」

「なんでだよっ！！」

暫しの別れ（後書き）

無月「・・・・・・・・／／／／」

作者「いやーさすがフェイトだねー」

無月「お前・・・・・・・・斬る!!」

作者「A○フェールド!!」

なのはVS無月 part 1 (前書き)

無月「なんかなあ」

作者「どうしたんだい？ ジョナイトニング君」

無月「それは作者に怒られます」

作者「気にしたら負けなのだよ」

## なのはVS無月 part 1

無月side

フェイト達から別れ俺もなのはも前のように普通に普通に学校に通っていた。アリスは俺に戦いを挑んで一方的にかかってきたときに簡単に倒されたことには、流石に落ち着いて前のように、好戦的な態度を見せなくなってきた。

俺となのはの学校での仲は今まで通りだったが、最近なのはがボーツと俺の事を見ていることがあるが、俺が何かしたのだろうか・・・？

「なーのはっ。お昼どこで食べる？」

今は学校のお昼どき。俺はいつも通りなのはに声をかけられる前に教室を出ようとしていたが、

「無月君！」

・・・そのなのはさんに呼び止められてしまった。

(うわあ何か嫌な予感するなー、(´Д、;)ノ)

なのはside

私はあれから強くなった。魔法のコントロールもかなり上達している。

だから・・・

「無月君私との約束覚えてる？」

「約束？高町が魔法を使つて俺に一撃でも与えたら私の話を聞いて・・・みたいな奴だろ？」

「うん。それでね・・・今日の放課後に私と戦つて!!」

「・・・」

「ダメかな・・・」

「・・・」

「無月君？」

「スー・・・」

「無月君？」

「スー・・・スー・・・」

「つて！起きてよ無月君!!」

「うおっ!!」

「もーちゃんと話を聞いてよ」

無月君はいつもどこかが抜けている気がするの・・・

「いいぜ」

「戦い。受けて立つよ」

「やったあ！」

私は嬉しくて、ぴよんぴよん跳ねる。

「・・・高町・・・ここは教室だからな」

「あっ」

周りを見るとみんなこっちを見て笑っていた。

「い、ごめん／＼」

「別に気にすることじゃねえよ。

それで、どこで戦うんだ？」

「うーん・・・取り敢えず屋上で」  
「分かった」

そして私とアリサちゃん、すずかちゃんは弁当を広げ・・・

「無月君もいつ・・・しょ・・・に」

いつの間にか無月君はそこに居なかった。

無月side

さて、放課後の対なのは策として何の装備で行こうかな？

「マスター、大地のSRと木刀なんてどうでしょうか？」

「うーん・・・大地のSRはいいんだけど」

「木刀はな・・・闇の書の際に剣を使うからな、

その際に剣筋で俺が同一人物だと疑われない方が良い」

「・・・そうだ。思いついたぜ。」

「・・・マスター。顔が怖いです」

俺は思いついた。重力と爆風の組み合わせを・・・

~~~~~放課後：屋上~~~~~

「来たか」

ようやくなのはさんのおでした。

「も~~~~う。無月君お昼ご飯の後教室に帰って来なかったから
また、途中で帰っちゃったと思ったよ」

「別に帰らねえよ。約束だからな。」

それから、結界張つとけよ。他の人にばれたらヤバイだろ？」

「うん。そうだね」

なのははそおい、結界を張った。

「いくよ、レイジングハート」

そして、なのはが変身した。

「へえそれが魔法なんだ」

「うん。それじゃあ・・・始め」「ちよつと待って」え？」

「制限時間は30分だ」

「うん。分かった・・・いくよ！」

なのははそう言い自分の周りに8個の魔力弾を生成した。

「シューート！」

魔力弾が俺に向かって飛んでくる。

（いくよ大地のSR・スモークンボム）

俺はダイナマイトを投げ付けた。

なのはside

私は無月君をあとつていた。

なぜなら、魔法使いVS一般人の勝負で

魔法使いが負ける訳がないと思っていたから。

でも、現実はずった・・・

「はあはあ・・・」

「何だ、魔法使いもこのくらいか・・・」

なんで？私の攻撃はなぜか当たらない。

そして無月君が投げるダイナマイトは正確に私にダメージを与えている。

「アクセルシュート！！！」

私は魔力弾を15個生成して、無月君を攻撃した。
けど・・・

「まだまだだな、果てろ！ロケットボム！！」

15個のダイナマイトが投げられ、私は回避を試してみたけど、
バシユツバシユツバシユツ

ダイナマイトが空中で方向転換を何度もして、

ドガアアアアーン

私の魔力弾が全て落とされた。

「この程度じゃ俺には勝てないぞ、高町」

「まだ・・・まだいけるはずなの！！」

「そういう訳にはいかないんだよ・・・果てろ」

ドカアアアアーン

私は少し爆風をくらってしまった。

「くう・・・でもまだ・・・!!?」

あれ？体が動かない!?

「ああ今の爆風には少し細工をさせてもらってな。

爆発の際に、中に仕込んだ麻痺粉が散布される仕組みなんだ。もちろん。俺には効かないがな」

彼はそう言っ指でピースを作る。

「・・・っとはい終了。これにて戦いを終了します」

「えっ・・・まだ・・・まだ私は戦えるの!」

「最初に行っただろ？制限時間は30分だっ」

彼はそう言っ、私の傍に着た。

「まあ今日だけは、少しだけ話を聞いてやるよ」

「ほ、本当!？」

彼は物凄く驚いていたけど、少しだけ優しそうな顔になって・・・

「今日だけな」

そう言っ私の頭を撫でてくれた。

「ん~~~~／／／」

「ん？撫でられるの嫌いだったか？」

「うっん、そんなことにやいんだによ!!アッ／／／／」

「はははっ・・・今はまだ少し疲れているだろ？そのまま横になれ」

彼はそう言って、私の頭を太ももに乗せてくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

自分の身体中が熱くなっていることが分かる。

「む、無月君は・・・魔法を見てみて、どんな感じがした？」
「どんな感じ・・・・・・・・ね」

彼は少しだけ、考える素振りをしたけど、

「何にも感じなかったな」

って、きっぱり言った。

「はい、甘えんぼタイムは終了。ほらほら自分で立つ！」

彼がいきなり立ち上がったから、

ゴチン！

私の頭がコンクリートの床に落ちた。

「いたああ——い」

「あ、ごめんごめん」

彼はそう言ってまた私の頭を撫でてくれた。

「無月君！」

「どうした高町」

「名前」

「名前がどうかしたのか高町」

「私の名前はなのは。高町　なのは」

「知っているけど」

「なのは」

「大丈夫か高町」

「なーのーは」

「はぁ帰るぞ高町」

「そうじゃなくてー、苗字じゃなくて、名前で呼んでよ！」

「言ったら、俺に一撃でも与えたらって。それまでは高町だ」

「も~~~~」

いつの日か、私の名前を呼ばせてやるんだから！！！！

無月side

「どうしたんだよ、アルフィン」

「・・・」

「アールフィン」

「・・・」

「おーーーーーい」

「・・・」

家に帰ってからというものの、アルフィンのご機嫌が悪い。

「どうしたんだよアルフィン」

「マスターの意地悪」

「はい？」

「フェイトさんやなのはさんには優しく接しているのに、私の扱いだけ酷いです・・・」

「じゃあーどうしたら機嫌良くなるんだよ」

「私の人間化と今夜の添い寝の許可」

「・・・分かったよ、許可するよ」

「・・・え、本当ですか!？」

「ああ」

「やったあああーそれじゃあ早速・・・」

そして指輪が輝きアルフィンが人型になった。

アルフィンの姿は「シャイ○ング○オース ○エザー」のアルフィンと全く同じである。理由は、作者が好きだから。

「それじゃあ早速寝ましょう」

「はいはい」

その後、無月とアルフィンは一緒にベッドで眠ったが、

アルフィンが途中から服を脱いで、無月の顔を自分の胸に押さえ込んで、

谷間に挟んだため、無月に怒られて、ベッドから追い出されたのは後になって分かったことである。

なのはVS無月 part 1 (後書き)

無月「・・・おい、コラ」

作者「ヒューヒュー・・・」

ダッ！
↑逃走

無月「待てコラ」

ビュッ！
↑ナイフ投影

作者「グバッ！！」
↑ナイフに付与されたワイヤーにかかる
バタッ
↑倒れた

ハヤテ（借金執事では無いです）（前書き）

作者「無月。図書館に行ってきたくれ」

無月「は？何で？」

作者「とある人物とのエンカウントを頼む」

無月「図書館……ああ、あの子ね」

ハヤテ（借金執事では無いです）

無月side

俺は今図書館に居る。理由はもちろん、はやてと会うためだ。

（借金執事では御座いません）俺と取り敢えず、近くにあつた

「古代ギリシャ神話」神々の名前と由来」という本を呼んでいた。
つい夢中になって1700ページはある本の400ページに差し掛かる頃、

「んーーーーん—————！！！」

近くから声がした、そこに行くと・・・

「んーーーー・・・んーーーー・・・・・・はあ」

はい、いました。はやてちゃんです。

実際に見てみると意外と可愛いんだな。

まあそれはさておき、

「これが取りたいのか？」

「え？うん、おおきにー」

うわぁ・・・。なにこの笑顔。可愛すぎるだろ・・・。

「他に取りたい本はあるか？」

「ん？でも・・・」

「遠慮してんじゃねえよ」

「ほんまか？えへへ、おーきに」

「気にすんな」

そして俺ははやての指名する本をどんどん取ってあげた。

（何？この量・・・）

「これでええよ、ホンマにおーきになあ」

「いいよ別に」

俺ははやての頭を軽く撫でてあげた。

「ちよつなにするん／＼」

「あ、わりい。ついくせで」

「くせ？もしかして・・・」

はやてが俺から少し距離をとる。

「俺は別に怪しい奴じゃねえよ！」

「うん。それはうちがよう知つとる」

「・・・まだ出会って1時間ちよつとなんだけどな」

「そんなことはないんよ。時間が短くても、

濃厚で甘い一時ならそれでええんよ」

「・・・甘い一時なんてあつたか？」

「もう。たとえよおー」

はやてはそう言い、ほっぺをプクウーと膨らます。

正直言っています。

可愛すぎます。はやてさん。

「あのな・・・」

「ん、どうかしたのか？」

何かはやてがもじもじしてる

こんな時、よほどのバカは「ト○レか？」とか言っただろうな・・・
俺は言わねえぞ！！

「うちとお友達になつてくれへんか？／＼／」

「・・・俺でいいのか？」

「うん！」

「そっか、俺の名前は冷氷 無月」

「うちの名前は八神 はやてよろしゅうな」

俺とはやては握手を交わした・・・

うわっ！笑顔が眩しい！！

「そついえばはやて、本を持つの大変だろ。

家まで送つてやるよ」

「え、いいよ。そこまできーつかんでも」

「あっそう」

「むゝ。そういう時は、無理やりでも送るもんやっちゅうに」

「はいはい、どうせ送るよ」

「おおきに」

そして、はやての家に到着。

「あれ？真っ暗だけど。家に誰もいないの？」

「うん。まあ・・・な」

「ふーん。まあ俺もだし。気にするなよ」

「そうなんか・・・って無月君も！？」

「？ああそつだぜ、まあ俺も親が居ないんだよ・・・」

二人の間に暫しの沈黙が流れる。

「・・・なあ無月はん」

はやてが顔を真つ赤にしている。
何か言いたそうだな・・・

「今日、泊まって行かへん？」

「・・・はやては俺との一夜を過ごしたいのか？」

「ち、違つよ！・・・もう・・・無月君のえつち／＼／／」

「なぜに！？てか、今日は泊まるのは無理だよ。着替えとか持つてきていないし」

「じゃあ明日、明日泊まりに来てよ！」

「んー・・・しょうがないな。いいよ」

「やったー！ー！！」

「それで、明日は図書館にくるのか？」

「うーん・・・もう本は借りたからうちは用ないんよ」

「そっか、じゃあ俺は今日読んでいた本を借りてくるよ」

「そないなん？じゃあうちもいく」

「そっか。無理するなよ」

「はいはい」

「それじゃあ明日な」

「え、もう帰るん？」

寂しそうな顔をするはやて。

「また明日会えるだろ」

俺はそう言つてはやての頭を撫でる。

「むっ」。また子供扱いする／＼／／／

それにご飯くらい食べていけばいいのに」

「食材がね。・・・そうだな、明日、図書館の帰りにスーパーに行って材料でも買ってくるか」

「うちも行くでー」

「はいはい。それじゃあなはやて。

おやすみ」

「無月君もおやすみー」

まだ、8時10分か・・・公園にでも行つて修行するか。

なのはside

今日の塾は溜めにたまつた課題が多くて

大変だったな・・・

公園で少し休んで行こう・・・

ザッ、ブン、シュツ、ガン！

（なんの音だろう？）

公園の少し奥付近から、何かの音がする。

（誰かいるのかな？）

なのはは気になって見てみると・・・

（無月君！！）

そこには彼が居た。

無月side

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

俺は公園の少し奥の広まで木刀を2本持って構えていた。

「ふう・・・魔神剣・双牙。魔人連牙斬。魔人双破斬」

結構やったな・・・ちと、疲れてきたな・・・

「まあ双剣の基本はこんなもんだろ。次は片手剣でつと・・・」

俺は片方の木刀を近くの木に立てかけた。

「すうーはぁー・・・魔神剣。虎牙破斬。瞬迅剣。雷神剣。散沙雨。
・・・まあ太刀の基本の技はこんなものだろ」

俺は帰る用意をする。

「・・・そこに隠れている高町は帰らなくていいのか」

「ふえっ!？」

「最初っから気づいているぞ」

「どうして、声かけてくれなかったの!」

あれ?悪いの盗み見ていた高町じゃなくて
声かけなかった俺ですか。

「はぁ。すまん」

俺は両手を上げる（ホールドアップ）ポーズをした。

「ところで、無月君は何してたの？」

「・・・見て分からなかったのか？」

「何かズバッ、ズドンッって感じだった」

うん。分からん！

「まあ普通の剣術だよ。気にすることは無い。じゃあな」

「あつ！せつかくだから今から家に・・・」

俺は嫌な予感がして、高町が言い終わる前に、俺はダッシュで逃げた。

「あつ！無月く~~~~ん!!」

後ろから何か聞こえたが、

無視だ、無視!!

（明日からは人気のない林や森、山で行うか・・・）

ハヤテ（借金執事では無いです）（後書き）

無月「公園での稽古はやめるか」

作者「てか、何で公園やっていたんだ？」

無月「え？近いから」

作者「・・・さいですか」

お泊り！？（前書き）

無月「今日ははやての家にお泊りかー」

作者「安心しろこの話では激しいものは出てこない」

無月「だっけ？」

作者「ああ。本当は20禁の奴を書いたのだが、とある作者みたいに運営からのお叱りがくる可能性があったのでな、急いで書き直したのだよ」

無月「・・・26話まで書き直していたね・・・だから寝不足なんだ」

お泊り!?

すずか side

私は昨日図書館で凄いものを見てしまった。

それは、あのクラスでは人と全く話さない無月君が、

私の友達のはやてちゃんと仲良く、楽しそうに、笑顔で

お話をしていたの!」「仲良く、楽しそう、笑顔」「↑大事なことから2度言った。

私はその後、二人の後を付けてみた。そしたら無月君がはやてちゃんの家に入

って行っちゃった。それから私は塾があるから、

暗くなるまで待って、帰ったんだけど、

その間に、無月君がはやてちゃんの家からは出てこなかった……。

これはなのはちゃんたちと作戦会議をしなくちゃ!!

「なのはちゃん、アリサちゃんちよつとお話があるんだけど

お昼になったら、屋上に集合しよう!」

「別に良いけど、どうかしたのすずかちゃん?」

「もしかして、無月の奴に何かされたのか!?」

「違うよアリサちゃん!取り敢えず、お昼に屋上ね」

「うん」

そして、お昼タイムになり、私となのはちゃん、アリサちゃんは屋上のベンチに座って、お弁当を広げていた……

「それで?、話って何よすずか」

「うん。実はね……私の友達にはやてちゃんっていう

私たちと同じ年の女の子がいるんだけど、その子は

足が悪くて車椅子の生活を過ごしているんだけど、

本が大好きで、よく、図書館に通っているの」

「それで？」

「ここからんだけど、昨日私も本を借りに、図書館に入って
本を探していたんだけど、そのはやてちゃんと

無月君が楽しそうにおしゃべりしてたの！」

「・・・・・・」

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・・

・
「」

「「ええええええー！！！！！！！！」」

「うつそ！あの全く人と話さない無月のやつが！？」

「私がいつもいつもいつもいつもいつも

いつもいつもいつもいつもいつもいつも

もいつもいつもいつもいつもいつもいつも

つもいつもいつもいつもいつもいつも

話しかけているのにあしらっている無月君がなの！？」

「ふ、二人とも落ち着いて。まだ話は終わってないよ！」

「それじゃあさ・・・」

「「？」」

「今日、無月の奴の後を付けてみない？」

「「・・・・・・」」

誰も反対意見を出さなかった。

無月side

（しつかし・・・・・・今日は静かだな）

そう、今日は高町、月村、バニングス共々が早々とどこかに行ったため、静かな一時を過ごしていた。

（ああ・・・・・・平和だあ・・・）

無月はお昼時間の後の女子3人からの

鋭い視線を受けていたが、そんなものには気づかずすやすやと、放課後まで眠っていたのであった。

~~~~~放課後~~~~~

俺はHRの後、すぐに教室を出た。

後を追ってくる3つの人影には気づかないまま、

図書館に向かった・・・。

本を借りたあと、はやてのところに向かった・・・

「おうはやて待ったか？」

「そなた待つてへんよー」

俺ははやての頭を撫でた。

「んっ・・・／／／」

「あ、そうそう、着替えたりしたいから俺の家に寄っていくけどいいか？」

「うん、ええよ」

「よし、行くか」

「おおー」

なのは・すずか・ありさ side

「「「・・・」」」

みんな、目の前の「コウケイ」が信じられなかった。  
なぜなら・・・無月君が笑顔で手を振り、  
はやてちゃんの頭を撫でて話していたからだ。

「「「いいなあ・・・」」」

なぜか、3人の言葉が一緒だった。

「べ、別に私はあんな奴のことなんか・・・／／／」

「私は別に・・・無月君のこと・・・／／／」

「あははは／／／」

なんだかんだで3人とも無月のことが気になっているのはなぜだろうか？

無月side

俺の家に着いた。

「すぐ戻ってくるからここで待っとけよ」

俺はそう言いながらはやての頭を撫でる。

「むぐぐ。そうやって女の子を落としているんちゃうか？」

「いや、俺の場合学校ではいつも独りだし。

友達とかもいないからな」

「へえそうなんや。

「だから俺のことなんか

好きになる人なんていないよ」

俺は家の中に入る。

（さてと、着替えて、昨日の夜に用意しておいた

お泊りセット（着替え等）を持ってつと・・・行くか）

「お待たせー」

「は、早いんやなー」

「まあ昨日のうちに荷物まとめていたからな」

「そかそか、そんなにうちのY「それはない」・・・

はやてちゃん泣いちゃうで・・・」

「涙目に上目遣いはやめてくれ。理性が飛ぶ」

「とんでええよー／＼／＼」

さらつとなに言っているんだこの狸。

「・・・何か今失礼なこと考えなかった？」

はやての後ろに黒いオーラが見える気が……（；・）

「考えてねえよ」

俺ははやての頭を撫でる。

「もう。そればかり。」

でも、悪い気はせんへん／＼」

「そつか。よし、次は食材の買い物だな」

「ほないつくで～～」

俺とはやてはコンビニに向かった。

作る予定なのはカレー。材料は普通で二人で作るつもりだ。

～～～～～～～～

「よし、買い物も終わったし、かえろつか」  
「そやな」

～～～～～～～～

二人ははやての家へと向かった。

お泊り！？（後書き）

無月「・・・あの3人ってストーカーになってるぞ」

作者「言ってるいるだろ？原作崩壊だと」

無月「・・・さいですか」

作者「20禁の編集は心に染みたよ・・・」

追跡?・・・いえ、ストーカーです(前書き)

作者「ああーああー」

無月「どうした、珍しいな」

作者「いや、姉貴にいままでPCを占領されててな」

無月「ここでそのリアルな話はよそうよ」

追跡？・・・いえ、ストーカーです

なのはside

私は今、アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に追跡中なの。

相手は、無月君とはやてちゃん。私達3人にも笑顔なんて

全く見せてくれたことなんて無かったのに、はやてちゃんには  
笑顔を向けて、そのうえ頭を撫でているの！！

羨ましいの・・・じゃなくて！！！！

いや、私もされたいとかじゃないんだけど・・・

あ、二人がはやてちゃんの家の中に入って行った。

「どうする？二人とも」

「取り敢えず・・・夜まで張り込もう！」

「「おおー！」」

無月side

俺ははやてと一緒に台所に立った。

「無月君なかなかの包丁捌きやなあ」

「まあな、夫にでもほしいのか？」

「ち、ちよっ・・・何言うてんねん！バカなんとちゃうか！！！！」

なぜか顔を真っ赤にして、否定する。

まあ可愛いから許す。

「あ、人参とって」

「ほい」

「ルーは辛口でいいか？」

「・・・いや、ここは甘口やる。  
てか、小学3年生で辛口で」

「別にいいだろ。それに辛口は  
幼稚園生の頃からだし」

「ありえへんわー」

「・・・ん？なんかこれって・・・」

「なんかこれ、新婚夫婦みたいだなだな」  
「ぶっ！」

「おいおい、何でふいてんだ？」

「お前のせいだわバカ！／＼／」

パンツ！

「・・・そのハリセンどこから出した？  
それに叩かれても痛くねえぞ」

「それは企業秘密や。  
痛くないのは、研究のたわものや」

こいつって無駄なところで才能を開花させていないか？

「よし、カレーの準備も出来たし、食べるか」

「おー待ってました！」

「いや、お前も一緒に作っただろ」

ご飯をお皿によそい、カレーをかける・・・

「いただきます」

二人同時に食べる。

「「あつつ！！！」」

そりゃそうだろうよ。

はやてが涙目になっている……

マジ可愛い……

少し冷めてからもう一度……

「うん。うまいな」

「そりゃあこの美少女はやてちゃんが……

ごめんなさい、その冷たい視線はやめてください」

「許さん」

「ええーそなけつたいな」

「自分で自分を美少女呼ばわりする奴が悪い」

「でも、うち、かわええやろ！」

「確かに可愛いけど、自分で言う奴は嫌いだ」

「うーん。可愛いと言われたことに喜ぶべきなのか、嫌いと言われて落ち込むべきなのか……」

「さっさと食わんか！」

「怒ったア〜〜」

こんな感じで時間が過ぎていった……

なのは・すずか・アリサside

只今の時刻は午後8：40分

「遅い！あいつ何やってるの！？」

「ア、アリヤサシャちゃん落ち着いて！」

「「すずか（ちゃん）もだよー!!」」

そう。無月君はいまだにはやてちゃんの家から出てこない。

「まさか！本当にはやての家に泊まる訳じゃないわよね!？」

顔を真っ赤にして、なのはに当たるアリサ

「ふえっ！そ、それはないんじゃないかな？」

「じゃあどうして出てこないのよー！ー！ー！ー!!」

「アリサちゃん。落ち着こうよ。」

こういう時は、しんこにゆうだよ!」

「すずかちゃん、かみながら言われても

説得力無いよ」

「でも、どうするの？そろそろ家に帰らなきゃ」

「それもそうね・・・よし、月曜日に問い詰めましょう!」

「「うん!!」」

そして、3人はそれぞれの家に帰っていった。

無月side

午後9：10分そろそろかな

「はやて」

「ん？」

「俺、少し外に行ってくるな。」

10時頃に戻ってくる」

俺はそう言って、「時雨金時をバックから取り出し」（ここ重要）、

肩にのせた。

「何するん？てか、どうやってバックから竹刀を出したんや!？」

「ん？ああトレーニング・・・かな？」

そして、竹刀の件は企業秘密だ。」

「そつか・・・ん、トレーニング？」

「まあな。何かを得るためには同等の代価が必要なんだ」

「そつかぁ・・・でもその台詞ははが」

「それ以上言ったら・・・」・・・はい」

あれ？俺って錬金術も使えるんじゃない？

「でも、無理せえへんでな」

「ああ分かっている」

俺ははやての頭を撫でる。

「じゃあ行ってくる」

「氣い付けな」

~~~~~

ここは林の中、時間帯と場所的に誰の気配も無い。

「無敵の攻撃隊5体召喚」

氷の剣を持ったブリザードを前に
時雨金時を構える。

「さぁ。稽古の時間だ」

俺は剣を構えた。

すずかside

いきなりですが、私は今猫^{ミユウ}を探しています。

理由はさっきまで膝の上に乗っけていたミユウが、いきなり林の中に入っていったからです。

「ミユウどこ〜」

どれくらい探したかは分かりません。
そのとき・・・

キーン、キーン、キーン・・・

何か、金属同士をぶつけている音がします。
音のする方に足を運ぶと・・・

「えっ・・・無月・・・君？」

そこに居たのは、剣を持った無月君と剣を持った水色の人型の何かでした。

人型をした何かが無月君に剣を振り下ろす。

「っ・・・!!」

無月side

俺はブリザードロイドを5体から12体に増やしていた。

「ちっ！さすがに12体はきついな・・・そろそろあれをするか」

俺は刀の先を地面スレスレの位置まで下ろした・・・

「時雨蒼燕流守式二の型【逆巻く雨】」

俺は刀で水（雨の炎）を巻き上げて姿を隠し、
体がかめることにより攻撃をかわす。

このとき、大量の炎を消費するが、俺には特に関係ない。

「時雨蒼燕流攻式八の型【篠突く雨】」

相手の懷に飛び込み鋭い斬撃で突き上げる。

「って、後は特式とかじゃなきゃ無理だろ！」

ちっ、やはり一本じゃやりにくい・・・

「雨のVG起動・・・」

俺は二刀流になった。

「よし、行くぜ！」

そこからは早かった。片方の刀で防ぎ・起動をずらし、
もう片方でブリザードロイドを斬る。

そして、全てのブリザードロイドを倒し終わったとき・・・

「無月君！！！」

「・・・は？」

なんとそこには、月村が居た。

「なんで・・・月村がこんな時間にこんなところに？」

俺は内心もの凄く焦った。だが、すぐにおちついた。
なぜなら・・・俺には「あれ」があるではないか・・・

「無月君！今の一体何なの！？」

俺は、取り乱しているすずかは気にせず、

「月村、俺の目を見ろ！」

俺の目に写っていたものは、赤い模様。

それは、絶対の命令を発動させることが出来る

【王の力】俺はそれを・・・【ギアス】と呼ぶ。

「冷水無月の名において命じる、ここで見たことは忘れる」

その瞬間、俺の目の模様が羽ばたいた・・・

「・・・はい。無月様。私はここで見たことは忘れます」

「よし、早く帰れ」

・・・そういえば、この世界でも同じ人には1回が
限度なんだろうな。

「つと、やっべー！10時15分じゃん！！」

はやてになんて言われるかなー・・・」

俺は急いではやての家へと向かったのであった。

「・・・ギアスってチートじゃね？」

「マスターの存在自体がチートです」

「それ、何気に傷つくな」

否定できない無月であった。

ところで、なのは、すずか、アリサの3人は
帰りが遅いということだ、

親に怒られたことは余談である。

追跡？・・・いえ、ストーカーです（後書き）

作者「ちっ!」

無月「何終わると同時に舌打ちしてんだよ!」

作者「いや、今日の最後のすずか side で完全にフラグ立てよう
と考えたけど、今はいつかなーってことで強引に終わらせたことが
心残りで・・・」

無月「・・・消したるか?」

帰宅〜ドアの向こうは修羅〜（前書き）

無月「やっべー、遅刻だぜ。はやて怒ってるかな」

作者「うわぁー。女の子を待たせるなんて

サイテーよ」

無月「・・・お前誰だよ」

作者「はよせい、フラグメーカー」

帰宅→ドアの向こうは修羅

無月side

「遅い！心配したんよっ！！」

涙目のはやてに怒られました。はやての家に着いた時間は10：28分。つまりは約30分近くの遅刻である。

「ごめん、ごめん。少し、道に迷ったり、訓練に集中しすぎちゃったね」

「・・・戻って来ないかと思ったやん」

はやてはそう言い車椅子にのりながら

俺にしがみついてくる。

俺ははやての頭を撫でるが・・・

「あ、俺、汗かいてるから風呂借りるな」
「う、うん。いいよ！」

何かはやての頬が赤くなっていたが
気のせいだろうか・・・

「・・・絶対驚かせてやる」

はやての言った言葉は無月には届かない。

~~~~~

「へえ、結構広いな」

はやての家の風呂場はかなり広かった。

「ちゃっちゃんと浴びるかっ！」

俺は頭を洗おうとしたが・・・

ガチャッ

「へっ？」

そこには、なにも身に付けていないはやての姿があった。

「な、なな何ではやてがここに！？／＼／」

「いや、無月君に洗ってもらおうかなって・・・  
それに、一緒に入りたかったし・・・ダメ？」

うぐっ！なんて破壊力だよ！！

ただでさえ、威力が高いのに、はやての体のいたるところが丸見えで・・・

い、いかん！こんな少女を襲ってはいけない！  
自分を保て、冷氷 無月！！

「あ、ああ。いいよ。おいで」

「えへへ、ありがとう／＼／」

俺ははやての体を意識していた。

だってさ、俺だって男の子だぜ

いくらまだ幼いいても、女の子には

興味ぐらいあるんだよ！！

あ、ロリコンではないぞ。

「やっぱり無月君も男の子なんやねえ・・・

さ、触りたいんか？／＼／」

「遠慮させていただきます」

「・・・そっか、無月君はうちのことが嫌いなんやな」

「いや、嫌いとかじゃなくて」

「あははは、冗談よ」

はやてはそう言って、俺の手をとり、

自分の胸に押し当てた。

「――！！！！！！」

「あっ！」

俺は驚いて、後ろに倒れた。はやてが俺の手を掴んでいたため倒れた俺の上に必然的にはやてが覆いかぶさる。

「「！？」」

そのとき、俺とはやての唇が合わさった・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

どれくらいの時間がたったのだろうか。

「あつ・・・ご、ごめん！／＼／」

「・・・いや、うちがその・・・」

急におしかけたのが悪かったわけやし

気にせんでええよ／＼／」

「気にせんでええって・・・」

女の子はそおいうの気にした方が  
いいと思うぞ」

「むゝゝ無月君だからええって言うてるやろ！」

「・・・それって聞き方変えれば

告白みたいなもんだぞ」

「こくつ！！・・・そ、そやああ・・・／＼／」

「まあいいから、そろそろ俺の上からどいてくれ、  
理性がもたん」

はやてがずっと俺に覆いかぶさっているので、  
いたるところがまだ丸見えです。

眼副、眼副・・・

「・・・飛ばしてええよ」

「え？」

はやてが何か言ったとき、

はやてが唇を合わせてきた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そしてまた沈黙かと思いきや・・・

「んっ・・・・・・・・」

はやてが舌を入れてきた。

俺は少し意地悪をしようと思い、俺も舌を入れた。

チュパ、ピチャ……

はやての頬が紅くなっている……

（そろそろいいだろ）

俺はキスをやめた。

「あっ……」

はやてが少し残念そうな顔をしたような気がした。

「なんでやめるん？」

少し機嫌が悪そうだった。

「いや、そろそろ風呂出ようぜ」

「う、うん」

そこからはやてはまさに神速だった。

髪、体を洗い、そのまますぐに風呂場から出ていった・

「……はやての奴足悪い状態なのに

どうやったらあんな速度で移動出来るんだ？」

乙女心が分かっている男の子がそこに居た。

はやてside

ああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

うちのばか、うちのばか、うちのばか！！  
どうしよう、恥ずかしいよ・・・

「うちも女の子なんやな・・・」

無月君とキスして・・・

「はふう~~~~~／／／」

ガチャ

ビクッ！！

無月君がお風呂場から出てきた。

（どなんしよう・・・顔を向けられん／／／）

「もう11時過ぎか・・・なあはやて、

俺の寝る所って何処だ？」

「えっ！ええええー！ー！ーとおおー！・・・

っ、付いてきて！！」

「？あ、ああ」

な、なんでこうも平然としてられるの！？

いや、やっぱりアタックがたりへんのちゃうのか・・・？

「ここや」

「ああ……ここつてさ、

明らかにはやての部屋だよな」

「そうやで、何か問題あるんかー？」

「いや、無いほうがおかしいだろ」

うぐっ……まだや、まだ諦めへんで

「ええやん、キスしたなかやろ？」

こういう時に車椅子の生活は不便やなあ……  
キスしたくても顔が物凄く離れてるもんなあ……

「うつ……はいはい。

わかりましたよ」

「それならええねん」

勝った。

「ほな、うちをだっこして、  
ベットにはこんでーなあ」

うちは無月君の腕に抱きつきながら言う

「はいはい」

彼はそう言って、うちを

お姫様だっこして……

「って、なんでお姫様抱っこやねん!？」

「?別に良いだろ、はやて軽いし」

「そ、そかあ／＼／」

バフッ

「これで良いだろ？じゃ」

彼はそう言って部屋から出ようと・・・

「って、どこ行くねん！」

「え、居間のソファで寝ようかと」

「ここ」

「いや、ソファだ」「ここ」・・・

「うちのこと嫌いなん？」

「・・・分かったよ」

「やったあー！」

よっしや！

バフッ

「えへへ／＼／」

「はやてって意外と甘えん坊なんだな」

「そんなことないよう」

彼はうちの頭を撫でてくれる。

私はそれで安心できる・・・

「ありがとな無月君」

私はそう言い、無月君にキスをした・・・

嫌がられなかったことが私にとっては嬉しいことだった。

「私を抱いて」

「えっ・・・お前そおいう歳じゃないだろ・・・」

「え？いや、そっちの抱いてちゃう！」

うちはそう言っつて服を脱ごうとする・・・

「っ！バカか！／＼／」

「ふふっ・・・冗談よ／＼／」

「冗談は休み休みに言え」

彼はそう言いながらもうちをちゃんと抱きしめてくれた。

「ありがとなあ・・・」

私はそう言っつて眠りに落ちていった。

帰宅〜ドアの向こうは修羅〜（後書き）

作者「くっくっく・・・」

無月「・・・・・・・・テンメエエー――!!」

作者「フェイトに続いてはやてとはな〜」

無月「お前のせいだろうが!!」

### 3人の女の子（修羅）（前書き）

無月「何かさ、この話嫌な予感しかしないんだけど」

作者「気のせいじゃにゃい？」

無月「かみながら言われても説得力に欠けるよ」

作者「……さいですね」

3人の女の子（修羅）

無月  
side

そして月曜日になった。

え？土曜日・日曜日はどうしたって？

そりやあ読者の皆様のご想像にお任せしよう。

起きている間はゲームをしたりお話をしたりキスしたり・・・

えっ 何かおかしいのが一つ混ざったような……

ご飯を作るとき、お風呂に入るとき、寝るときは一緒にやりましたよ。

そんな訳で、**学校の教室**

そこには修羅（3人の女子）が待っていた。

「無月くくくんちよっつとよろしいかしらー？」

「アリスちゃん口調がおかしいでございますわよ」

「すずかちゃんも口調がおかしいですわよ」

上から

アリサ、

すずか、

なのは、の順である。

「……すいません。クラス間違えました」

俺は逃げる。本気で逃げる。

「『まてえええええー！！！！』」

え、何？何で俺あいつらに追いかけられているの！？

「マスターが落し神だからです」

「意味わかんねえよ！！」

サッ

えっ・・・

俺は挟み込まれた

俺の取るべき行動は・・・

1、逃げる

2、戦う

3、かわす

4、窓から飛び降りる（3階）

5、取り敢えず謝る

1は逃げ場がない。

2はまず勝てない。

3はかわせる自信がない。

5は・・・負ける気がする。ってことで4だ！！

俺は窓を開けて

ダッ！

飛び降りた・・・

「えっ！？ここ3階だよ（なの）！！」「」

見事にハモッた3人であった。

くくくくくくく

3階から飛び降りるのって意外と痛いな・・・まあいつか俺は立ち上がって、教室に戻ろうとしたが・・・

「・・・なんで・・・お前らが・・・ここにいる？」

そこ（俺の後ろ）にはさっきまで3階にいたはずの修羅がいた。

俺は拉致され、教室に連れて行かれ、お昼時間になるまで監視された。

くくくくくくく 屋上くくくくく

「無月君・・・O H A N A S Iなの」

「・・・なんのことだ」

「とばけんじゃないわよ！」

「そうだよ無月君。素直に話そうよ」

・・・3人の目からハイライトが消えてるんですけど・・・  
てか、俺こいつらとの仲悪いよな・・・？

「俺に構わないでくれないか？」

「くくく なっ！！」「くく」

俺はそう言って逃げ・・・じゃなくて、教室に戻ろうとしたが・・・

「構わないでくれって言われてもねえ」

「女の子の家にお泊りなんてねえ」

「普通はしないよねえ」

「「無月君」」

「・・・・・・・・」

「・・・こいつら何が目的だ？」

「月村、高町、バニングス。

何が目的なんだ」

「はやてちゃんの家にお泊った理由」

「はやてちゃんとの関係」

「はやてちゃんの家で何をしたのか」

「・・・・・・・・」

俺には基本的人権の尊重は無いのか・・・？

「はやての家に泊まった」「泊まった！？」「・・・

理由は誘われたから。関係は友達。家ではゲームとか

お話をした。以上だ。」

「襲ったりはしてないでしょうね」

「アリサちゃん。無月君に限ってそんなこと

しないよね」

「すずかちゃんの言うとおりなの。無月君はそんなこと  
するわけないの」

「・・・3人の後ろに黒いオーラが見えるのは俺だけなのかな？」

「いやらしいことは・・・・・・・・してないぞ」

「」「嘘だ!!」「」  
「ひ○らしか?」

俺はダツシユで教室に戻って、身支度を済ませ、家に帰った。

なのは・すずか・アリサ side

「怪しい」

「怪しいよ」

「怪しいの」

「どうする?」

「うーん、無月君は言わないだろうし・・・」

「ここはやっぱり・・・」

「」「はやてちゃんに聞こう（O H A N A S I）しよう（なの）」

~~~~放課後―図書館~~~~

車椅子に乗った少女発見。

「はやてちゃん!」

と声をかけようとしたすずかだが、

「すずか、あれ・・・」

アリサが指をさした先には・・・

「」「無月君」

そう、無月がはやての読みたい本を取ってあげたり、お話をしたりしていた。

「「「・・・」」」

「っ！殺気！？」

「どなんしたん？」

「「「こんにちははやてちゃん」」」

「こ、こんにちは（；・・）」

「「「ちよつつとその男の子をおかりしてもいいかな」」」

「は、はいっ（´・ω・｀）」

ガシッ

「「「行こう（なの）か」」」

3人は無月を拉致した。

無月side

どうしてこうなった。

「それで、はやてちゃんの家に泊まって、

どこまでやったの？」

「なんのことでしょうか」

そこははやての家。もちろん俺のとなりではやて「も」

正座をしている。そして、目の前には3人の修羅が・・・

「とぼける気？」

「素直に白状した方が身のためなの」
「うふふふふ」

「すずか、原作崩壊しすぎだろ・・・あ、みんなか。」

「な、なあはやて俺たちなにもいやらしいことなんて
してないよな」

「そ、そそそうやねえ無月君」

「はやて・・・焦りすぎ。」

「「「はやてちゃん」」」

「はいっ!。・・・(ノド)・・・。」

「「「ここで死にたい(の)?」」」

「え、それきようh「「無月君」」・・・はい」

「ん?・・・ところでなんでアンタら3人はそこまで
無月君に絡まるん?」

「「「っ!」」」

「べ、別に私は・・・こ、こいつの弱点とか
が無いかわりたかっただけよ!／／／」

「わ、私はなのはちゃんとアリサちゃんが無月君の後を
追うから、ついでに／／／」

「私は無月君のことが気になったから／／／」

「「な、なのは(ちゃん)!!」」」

「ほほう。てことは、なのはちゃんだけがライバル
ってことでええな」

「負けないのっ!!」

何か話がそれているような気が・・・

「ふっふっ・・・でもうちは無月君と、一緒にお風呂に入っだし、同じベットで眠っだし、そして何より・・・」

？何かはやての奴が爆弾発言をしているような気が・・・

「無月君とキスもしたんやでっ　!!!」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「ふっふっん、そう。・・・ってはやて!?!」

「ふっふ。ええやん別に」

そしてはやては俺を引き寄せ・・・

チュッ・・・

みんなの前で、唇を合わせてきた・・・

「「「!!!!!!!」」」」

バコッ!

「って何すんねん!痛いやんかー!!」

「ったり前だろうが!何みんなの前でキスなんてしてくんだよ!!」

「ええやん。無月君がうちに泊まっている間に何十回もしたやんか

／／／

「それとこれとは話が・・・」

はっ!・・・何か・・・嫌な予感が・・・

「「「無月君、はやてちゃん」」」

ドス黒いオーラを放つ修羅がそこにはいた。

「「「ちよつと、OHANASIしよつか」「」

その後、はやての家からは悲鳴が聞こえたという……

キヤアアアアア——————！！！！

「マスターはバカですね」

アルフィンの呟きは誰の耳には届かなかった。

3人の女の子（修羅）（後書き）

無月「・・・・・・・・」

作者「ん？お前焦げ臭！」

無月「テメエーのせいだゴラァ！！」

バゴツツ！！

作者「グハッ！」

無月の疑惑（前書き）

無月「……………」

ムッスーーーーッ

作者「…………（うわぁ……まだねに持つてるよ）」

無月「誰かさんのせいで酷い目にあわされたからな」

作者「大丈夫これから素晴らしく良い目にあうから」

無月「余計に怪しいわ……！」

無月の疑惑

無月side

「ふう。・・・さつきは大変だった」

「マスターが悪いと思います」

無月がはやての家で目が覚めた頃には
もう日が暮れていた。

「なあ、アルフェン。翠屋だけ？高町の家の名前」

「はい。そのように記憶しています」

「いっちょ行くか」

「・・・珍しいですね」

「いや、訓練をする前にシュークリームとコーヒーをね」

「なんですかその甘いものと苦いものは」

「マスター味オンチなんですね」

「・・・お前なにおこ「怒ってなんていませんよ」

「・・・嘘だろ」

「・・・ふんっ」

「・・・？」

「全く・・・マスターは。二人の女の子とキスするなんて

「・・・うらやま・・・じゃなくて、いやらしい」

「なんか言ったか？」

「何も言っていないせん!!」

「・・・さ、さいですか」

アルフィンも大変である。

なのはside

今日はとくに依頼もなくて暇だったから
お店のお手伝いをしているの。

ガラガラガラ

「いらっ……しゃいま………せ」

……え？なんで無月君が？

「……つて、ふえええええー！」

無月君ここにくるの！？」

「ん？なのは彼と知り合いなのかい？」

「えっ、お父さん無月君を知ってるの！！」

「彼はここの常連さんだぞ」

え……ジョウレン……？

「ええええー！……！？」

「なのは、静かにしましょうね」

お母さんの……顔は笑っているのに
目が笑ってないの……。

「あははは……はい」

「……志郎さん。シュークリームとコーヒーを
お願いします」

「コーヒーは？」

「いつもので」

「了解」

お父さんがコーヒーをお母さんがシュークリームを用意する。
私は無月君の隣に座った。

「無月君ここの常連さんなの」

「ああ」

「ふーん・・・それにしても一回もあつたこと無かつたよね」

「・・・そう。かな？」

「・・・なんで目をそらしてるの！そしてその間は何なの！？」

ゴンッ！

私の頭にチョップがきた。

「なのはちゃん・・・」

「はい」

お母さん怖すぎるの・・・

あ、そうこうしているうちに無月君が食べ終わっちゃの。

「志郎さん、桃子さん。ご馳走様です」

「いえいえ」

「あ、無月君今日もどうだい？」

今日？

「いいですよ。どうせこの後一人でやるつもりだったので」

「それでは行こうか」

あれ？無月君とお父さんが道場の方に・・・

「私も行くのー」

私は無月君とお父さんの後を追ったの。

無月side

「すいませんね。丁寧に水まで張っていただいて」

「いや、こちらは無月君しか使えないその技に興味があるのでね」

はあ、どうしようか・・・時雨蒼燕流は高町に見られたくないんだけどな。

まあしょうがないかな。

「ではいくよ」

「はい」

そして二人の剣士は構えた。

なのはside

「す、凄いの」

私は凄い戦いを見ているの。

無月君がお父さんの速度についてっているの。

それに無月君は・・・

「どうした？水を操らないのかい？」

「しょうがありませんね・・・
では行きますよ」

そう言った後、無月君の雰囲気が変わったの・・・

「時雨蒼燕流守式七の型【繁吹き雨】」
「くっ・・・!!」

え？水が巻き上がったの！でも、魔力の感じはしない・・・

《ユーノ君》
《何かあったの？なのは》
《う、うん。何か目の前で凄い現象が起こっている
けど、魔力反応がしないの!》
《?分かった、すぐ行く!》

「それでは・・・攻めますよ。
時雨蒼燕流攻式八の型【篠突く雨】」
「まだだ!!」

《なのは》
《ユーノ君!》
《あの子だね》
《うん》

「時雨蒼燕流攻式攻式一の型【車軸の雨】」
「ぐわっ!」

そして、お父さんが負けたの。

「いやーやっぱり無月君には勝てないな」

「いえ、僕が勝てるのは水があるからですよ。」

水が無ければ技が使えないので僕が負けます」

「そんなことないよ。なのはの話じゃ、」

公園でもなにやら凄い技をやっていたらしいからね」

「あははは」

「今日はここまでにするのかい？」

「はい。これからは自主練習をしますし、」

これ以上はお店のお邪魔にもなりますので」

「邪魔ではないのだがね。よし、今日はここまで！」

「ありがとうございます」

「こちらこそ、ありがとう」

《なのは》

《うん。ユーノ君》

そして、彼は帰っていった・・・

無月side

「・・・・・・・・・・」

（あいつら、俺の後を付けていやがる）

そう、俺なのはとユーノが翠屋から後を付けているのに
気づいていた。

《どうしますか。マスター》

《取り敢えずは山に行って、技ではなく、

今日は素振りの稽古だな》

~~~~~

「はっ！、はっ！、はっ！」

俺は取り敢えずなのは達を無視して、  
素振りの稽古をしている。

《アルフィン。あいつらが帰ったら念話で教えてくれ》  
《了解しました。マスター》

俺はそのまま素振りに励んだ。

なのはside

私とユーノ君は無月君の後を追跡して、  
少し遠い所から無月君をかんs・・・じゃなくて、  
見ているの！

「ユーノ君、別に珍しいことはしていないね」

「いや、そうじゃないよなのは」

「えっ？どういことなのユーノ君」

「行動には必ず理由がある。つまり、彼にも強く

ならなきゃいけない理由があるはずなんだよ」

「で、でも、彼が魔法関係があるとは分らないよ！」

「な、なのは！静かに向こうになにか変化が」

「へっ？う、うん」

無月side

「ふう・・・こんなもんかな」

P r r r r r r

「電話か」

と、いつでも電話相手は一人しかいない  
そう、はやてだ。

「どうした？はやて（狸）」

「・・・何か今ムカついた・・・まあいいや、  
なあ、今日はうちに泊まれる？」

「はやての家に泊まる？うーんそうだな・・・  
今日は泊まれないけど、ご飯作りぐらいまでは  
いいよ」

「泊まれないんかいな。まあええけど、  
きてな」

「ああ、分かった。じゃあな」

「うん。あとで」

俺は電話を切った。

なのはside

「え？今、無月君何て言ったのかな？」

私は信じられなか・・・

「はやてっていう子の家に行くみたいだね」

ユーノ君リアルに傷つくよ、それ・・・

「・・・おしおきしなくちゃね」

「ひっ!」

私は無月君に向かって歩きだしたの。

無月side

「っ!!!」

!この嫌な感じとこの悪寒は・・・

「魔王」

「魔王じゃないよ、なのはだよ」

そこには魔王がいた。

「・・・どうした高町」

「無月君さっきの電話は一体何かななの」

「電話?何のことかな?」

「はやてちゃんとの電話なの」

うわぁ・・・負のオーラが大きくなったよ・・・

「・・・別に何でもないよ」

「へえ。女の子に家に泊まるうって誘われることが  
何でもないんだ」

「別にお前に関係ないだろ?」

「関係・・・無い？」

「ああ。そうだけど」

「・・・・・・・・・・」

ん、どうしたんだ？急に静かに・・・

「・・・・・・・・・・（泣）」

そこには泣いている高町が居た。

「えっ。何で泣いてるの!？」

「別に無月君には関係ないでしょ!！」

高町が町に向かって走りですが、木の根につまずいて転ぶ

ズサア

「いたっ！」

「なのは！」

「えっ？」

俺は高町に駆け寄った。

「なのは、大丈夫か!！」

「・・・・・・・・別に無月君には関係ないの!！」

なのはが俺から逃げようとするが、

俺は高町の手を掴む。

「関係なくは無いよ。俺がなのはを傷つけたからな」

「か、．．関係ないの！」

なのはが俺の手を振りほどこうとするけど、俺はその握る手に力を入れた。そして、高町をおんぶした。

「えっ．．．無月君！？／／／」

「膝、痛いだろ？血でてるぞ」

高町はこけたひょうしに膝を擦りむいたようだ。

「それで、何で泣いたんだよ」

「．．．．．」

「まあ言いたく無いなら良いけどよ」

高町が俺の背中に顔を埋める．．

「悲しかった．．．」

「何が？」

「無月君に関係ないって言われて．．

悲しかった．．．悔しかった」

「どうして？別になのはに関係ないぞ？」

「私だって無月君が好きなの！！！！」

「．．．．．え？」

無月はなぜこうなったのか疑問に思った。

## 無月の疑惑（後書き）

アルフィン「マスターは落とし神にでもなるつもりですか？」

ムッスーッ

無月「落とし神？何だそれ」

作者「お前のことだよ」

秀哉「この俺様を呼んだのかい！？」

全員「・・・・・・・・・・」

なのはフラゲ！？（前書き）

無月「ああゝ憂鬱だなあゝゝゝ」

作者「全くだよ。クラスで俺一人だけ課題未提出者になっちまったよ（リアル）」

無月「お前バカだろ」

作者「……あえて否定しない!!」

なのはフラゲ！？

なのはside  
言っちゃったの。

昔から思っていた人に、  
昔から思っていた言葉を・・・

「私だって無月君のことが好きなの！！！！」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

ああ、どうしよう・・・ふられるのに・・・  
無月君にははやてちゃんがいるのに・・・  
負けるって分かっているのに・・・

「そっか・・・・・・・・」  
「えっ？」

「高町が俺を好きになってくれるのは嬉しいよ」  
「・・・・・・・・」

「でも、俺は高町に今まで冷たく接していたのに  
どうして好きになったんだ？」

「・・・私がちっちゃい頃」  
「・・・ああ、あの公園でか」

「うん。あそこで声をかけてくれたから」  
「・・・ふーん。でも、そのときには秀哉もいたはずだけだな」

そう、あの場所には秀哉も居たの。

「秀哉君は目がいやらしいの」  
「ははっ・・・そうだな」

「……無月君ははやてちゃんの事が好きなの？」  
「……好きと嫌いでは、好きだぞ」  
「……」

分かっていただけ、それを聞いたら……  
また涙が……

「でも、高町のこと好きだぞ」  
「えっ？」

「まあすずかも、アリサもはやてもな」

「えっ、えっ、えっ、……どういことなの!？」

「いや、そういうこと」  
「……」

「あれ？もしかして、高町は俺がはやてと付き合っている  
とでも思っていたのかな？」

私は頷きながら……

「うん」

「まあそれが普通の反応だよな」

「？」

「あれは事故みたいなもの？だしな」

「事故？」

「ああ。はやてと一緒に風呂に入  
入って「ちよって待つてなの」え？」

「はやてちゃんと一緒に風呂に入った？」

私は腕に力を入れる

前話からの続きで無月はなのはをおんぶ  
している格好です。

「ぐはっ……高町さん？」

「……無月君は……」  
鈍感さんなの……！

ギョッ！……！

「グバー……ッ！……！！！」  
「あっ」

無月君が倒れた。

「えっえっえっ。大丈夫無月君」

「……ああ……なんとか」

今、無月君は地面に倒れていて、仰向けの状態。  
周りには人がいなくて、私は無月君の上に乗っている。

「無月君は、はやてちゃんと付き合っていないんだよね」

「……ああ……そ……うだ」

「だったら……」

私は、無月君にキスをした。

そのまま、舌を入れてみた……

無月君は最初は驚いていたけど、私の舌に舌を絡ませて  
きてくれる。

「んっ……」

二人の口でいやらしい音がしてる。  
けど、悪い気はしない……。..  
暫くして私は、無月君の上から降りた。

「・・・全く、はやてといい、高町といい  
よくキスするな」

「えへへ。。。いいじゃん。好きなんだから／＼／」

「はあ。全く。。。」

「あの。。。」

「ん？どうした」

「これから。。。キス。。。していいかな？」

「断る」

「無月君？」

私の言葉に感情が消えたの。

「え。。。いや、付き合ってもいない人が同士が  
キスするのは常識的に考えて普通はないぞ！」

「無月君」

私の目が単色になったの。

「いや、俺は正論を「無月君」。。。」

「無月君。。。死にたいの？」

辺の気温が下がったような気がするの。

「。。。勝手にしてください（涙）」  
「うん！！」

私の気持ちが好きな人に届いた？時だった。

「……あれ？なのは、魔法で傷治せるんじゃない？」

「 汗 ( ; ) 」

「……俺、帰る」

「え、ええええええ——！！」

「いや、自分で傷直して帰れ」

「無月君冷たいの……」

「つたく．．．傷は治せ。」

そしたら一緒に帰ってやる」

「分かったの！！」

私はすぐに治癒魔法を開始したの。

「よし、傷も治ったし。じゃあなー」

「えっ、一緒に帰ってくれるんじゃないの!？」

「俺にははやてが待っているんでな」

「無月君……」

「あ  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
」

私は無月君を捕まえて、またキスをしたの。

わっしょい、わっしょい。

「……何すんだゴリアー!!」

バゴツ！！

「いったー……い（涙）」

「……ほら、帰るぞ」

「は~~~~い」

こうなったら仕返しを・・・

「……………無月君」

私は無月君にキスしようとしたけど、かわされたの。

「もう、引つかからねえよ」

「あ、ひつど~~~~いの」

「次回は魔王対策でも行うか・・・」

「無月君？」

ドカアアア~~~~ン!!

私はレイジングハートを起動させて、収束砲をお見舞いしてあげたの♪

「……………二度と名前で呼ばれえ」

「無月君」

「……………はあ」

「ふふっ♪」

まだ、無月君は私たちのうち誰を選ぶのかは分からないけど、一歩リードなの？。

~~~~~

「じゃあな」

なんだかんだ言いつつちゃんと送ってくれた。
私は彼の行った先を見て

「絶対に私のこと、好きになってもらうの」

と、小さく呟いた。

無月side

「それで、言い残すことは？」

「え？なにその死刑宣告」

「とおせんや、うちという美少女がおりながら
他の女の子とキスするかふつう」

俺ははやてに怒られていた。

理由はくるのが遅かったこと、なのはとのキスだ。

（何でキスしたことがバレてる・・・？）

「女の感や！！」

（読心術まで取得したのか・・・）

無い胸を張るはやてだが・・・

「はやて、そおいうことはもう少し
大人になってからしましょうね」

「うちは子供ちゃうもん！
立派なレディやつ！！」

スパアアアーーーーン

・・・・・・・・・・

「いや、どこから出した、そのハリセン」

「企業秘密やって前にも説明したやろ」

はやてはニツコリ笑う（目は笑ってない）と

「さあ、夜はまだまだ長いで～～～」

「あ、じゃあ俺は帰る」

「え・・・・えっ・・・・ええええーーーー！！」

そして俺は逃げた・・・・

「あつ、無月君のばかやろーーーーう！！」

後ろで叫び声があるが、あえて気にしない。

なのはフラゲ！？（後書き）

作者「うゝゝゝゝん」

無月「どうした？考え事なんて珍しい」

作者「いや、そろそろA・Sに入ってもいい頃だけど、居残りやら
実力テスト一週間内やらで深く考えられないんだよなあ・って」

無月「でも、お前あの量を明日の朝に提出するって言っていたよな・
」

作者「・・・・・・・・・・」

無月「絶対終わらないだろ（爆笑）」

作者「シクシクシクシク（大泣）」

変態からの挑戦？（前書き）

作者「ぷしゅう~~~~」

無月「……………わりい。言葉がみつからねえ」

作者は頭から煙を発していた。

作者「いや、実は今日、A・Sの最後話を思いついてかこうと思ったのだが、A・Sにまだ入っていないと思いついて……」

無月「それと、《課題》だな……」

作者「……………はい」

変態からの挑戦？

無月side

「ふむ……」

「どうかしましたか？マスター」

「ああちよつとな」

俺はA'sに備えての作戦を練っているところだ。

「無論はやて側に付くつもりだし、武器も変えて、仮面を付ける予定だから、ボンゴレだとはばれないだろう」

「では何について悩んでいるのですか？」

「魔力の蒐集のことだ」

なぜなら、俺が本気になればザッと100ページぐらいまでは行くだろう。

だけどそれではやての覚醒までには時間が余り過ぎる。

「なるほど。ペース配分の問題なのですね」

「ああそういうことだ」

さてと、どうするかな……

「まあチートのマスターには関係ないでしょ」

「……お前なかなか酷いこと言うな」

「恐縮です」

「褒めてねえよ」

まあいいや。さてと、学校に行くか。

秀哉 side

やあ諸君。この物語の主人公である高町 秀哉だ。

目標は原作キャラのハーレムだ。

だが、俺の目標を邪魔する奴が一人いる。

そいつの名前は冷水 無月だ。

あいつはいきなり現れては、俺の恋人達をくすねていきやがった。どうせ、何かに付け込まれて脅迫でもさせられているのだろう。

そうだ！今日こそあの憎き冷水を地べたに這い蹲らせ

俺の恋人達を我が手に・・・

ハーハッハッハー――

無月 side

「今日も一日が平和でありますように」

本気でそんなことを願っている。

「朝っぱらから何言ってるのよアンタは」

「無月君おはよう」

「無月君おはようなの！」

「・・・・・・はあ」

俺の平和が一瞬にして崩れさった。

「ちょっと！あつてそうそうため息はないんじゃないの！？」

「アリサちゃん落ち着いて」

「・・・・・・ったく。ところで、なんでなののはは

朝からそんなにハイテンションなのよ」

「ふえっ！？え、えええーとーとーとー」

「「なのは（ちゃん）何か隠し事してない？」」

「えっ！！し、してないによしよんにゃことは」

（・・・高町。かみすぎ）

「・・・ふゝゝんじゃあきk「やあ」キャッ・・・」

ん？バニングスが何か悲鳴のような引いたような
声をあげたが・・・

俺はバニングスの方を向いた。

「お前が、冷氷 無月だな」

そこには変態がいた。

秀哉 side

「お前が冷氷 無月だな」

「・・・それが？」

こいつとぼける気か。

そうかそうか・・・

俺の恋人達を脅迫して自分の近くに
置いているようなクズが・・・

殺す！！

「お前、俺のなのはやてアリサにすずかの
弱みに付け込んで自分はハーレムか？」

ふざけんじゃねえよ！その立ち位置は俺なんだよ！
お前みたいなモブキャラが俺の恋人達に近づくんじゃねえ！！
ぶっ殺すぞこの変態！！！！」

ふっ・・・言い切ったぜ

「別に俺はお前みたいな変態に興味は無いし、
あいつらなら自分で勝手に俺のところにきている
だけだ。自分のところに来て欲しければ、
あいつらを連れて行け。俺には興味は無い」
「「「「は？」「」「」」

こいつは俺に喧嘩を売っているのか？
俺の嫁がこいつに自分から？
俺が変態？

俺はブチギレた・・・・・・・・

「上等だテメエーーーーー！
屋上に来い！テメエに風穴を開けてやるよ！！」
「そうか。だったらなのは達も呼べばいいんじゃないのか？
お前が俺をボコボコにすれば高町たちが感激して、
お前の虜になるんじゃないか？」

な、なんだと・・・・・・・・..
こいつ、案外良いやつかもしれねえな・・・

「ふっ・・・いいだろう。
その言葉確かに受け取ったぞ！！」

ハハッハッハ——!!」

勝った……………

無月side

「ふう」

ようやく行っただか。よし、

「帰るか」

俺は、全速力で荷物の整理をしようとすると――

「「「無月君?」」」

何か後ろからドスの聞いた声がした。

俺はゆっくり首を回して、振り向く……

ギギギギギイイイ――……

はい、修羅がいました」

「無月君、興味無いってどういふことかな、かな」

「うふっ……うふふふっ」

「むーげーっ――」

……月村。相変わらずの壊れっぷりだな。

「別にその通りだろ」

暫しの沈黙……

「「「はあああ――――!」?」

「え」

こいつら、何でこんなに驚いているんだ?
ってか、他のクラスの連中、逃げたな。

ここには俺とこいつら（３人）しかいねえじゃねえか。
・・・はやてとハラオウンがいなくて良かった。

「無月君！あんなことしといて興味ないは
酷いの！！」

「「あんなこと？」」

高町・・・それは俺に死亡フラグが・・・

「なのはちゃん。あんなこととは何かな」

「なのは、正直に言えば、遺言は残してあげるわよ」

「ひっ！」

うわぁ・・・高町。ドンマイ！

俺は全力で逃げようとしたが、回り込まれた。

「無月君。どこイクノカナ？」

「すずかは無月を抑えて。」

私はなのはを・・・カッ消す♪」

バニングス。それはある意味違うだろ・・・
てか、ヴァリアーのボスが表に出ていたような・・・

「うふふふ・・・少しだけね、ね」

俺の意識はそこで途切れた。

最後に見えた光景は・・・

高町がバニングスに首を締め上げられ、
空中に浮いていて、足をバタバタ振っている姿と、
それを見て、笑っているバニングスだった。

「アリサちゃん、二人を家に運ぼうか」

「そうね。そこでちゃんと聞こうかしら」

無月にはそんな卑劣な会話は届かなかった。

どうやったら、高町を片手で持ち上げれるんだ？

~~~~~一方その頃~~~~~

「くくくく・・・」

明日は俺の嫁が俺の手元に・・・」

顔は良いのに、性格がダメな奴がそこに居た。

## 変態からの挑戦？（後書き）

無月「おいゴラァ。何で俺に死亡フラグを立てていやがるんだ」

作者「死亡フラグ？ちゃうちゃう、ハーレムフラグだ（ー、㇏  
ゝ）キリッ」

無月「エクスカリバー」

作者「ひょっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9474z/>

---

魔法少女リリカルなのは～孤高の黒き剣士～

2012年1月13日01時51分発行